
調査年報 14

平成 13 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査年報 14

平成 13 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



八雲町 野田生1遺跡 航空写真



八雲町 野田生1遺跡 遺構調査状況



根室市 穂香竪穴群 竪穴住居跡調査状況



根室市 穂香竪穴群 動物意匠の付いた縄文土器

目 次

平成13年度の調査	
1 調査の概要	1
2 調査遺跡	4
チブニー1遺跡	4
チブニー2遺跡	8
虎杖浜2遺跡	10
宮戸4遺跡	12
穂香壟穴群	18
白滝遺跡群	22
上白滝6遺跡の調査	24
白滝3遺跡の調査	24
下白滝遺跡の調査	24
白滝遺跡群の整理	30
対雁2遺跡	32
野田生1遺跡	36
野田生2遺跡	40
野田生4遺跡	44
落部1遺跡	46
柴浜1遺跡	48
山崎5遺跡	52
山越3遺跡	52
山越4遺跡	53
本内川右岸遺跡	54
濁川左岸遺跡	56
キウス4遺跡	60
ユカンボンシC15遺跡	62
ケネフチ9遺跡	64
西島松5遺跡	66
西島松9遺跡	69
3 研修・研究会等	72
4 資料貸出し等	76
5 平成13年度刊行予定報告書一覧	77
6 組織・機構	78
7 職員	79
8 訃報	80

平成13年度の調査

1 調査の概要

今年度は道内9市町村に所在する18遺跡で発掘調査を実施した。このうち7遺跡は昨年度に続く調査である。

原因工事別にみると、北海道開発局の各建設部が実施する河川、あるいは国道の建設や改良に伴う調査が8遺跡、日本道路公団が実施中の高速道路建設に関連するものが6遺跡、土木現業所が実施する道路改良、河川改修に伴う調査が3遺跡である。このほか整理作業・報告書作成作業のみを実施したものが5遺跡ある。以下調査の成果を時代順に要約する。

【発掘調査】

旧石器時代

上白滝6遺跡は平成10年に続く調査で、北側地区では尖頭器を含む石器群のブロックが1ヵ所発見されている。白滝3遺跡では、西側部分で有舌尖頭器、彫器、搔器、石刃核、石核の出土するブロックが3ヵ所調査され、東側部分には尖頭器、小型のものを含む舟底形石器、彫器、搔器、錐形石器、石刃核、石核が出土するブロックが認められた。なお、白滝遺跡群の資料の整理作業を前年に引き続き実施し、今年度に「白滝遺跡群Ⅲ」の報告書の刊行を予定している。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、早期から晩期に及ぶ各時期の遺跡が調査されている。

(早期)

早期中頃の道東の石刃鎌石器群の遺跡が上白滝6遺跡南側地区で調査されている。

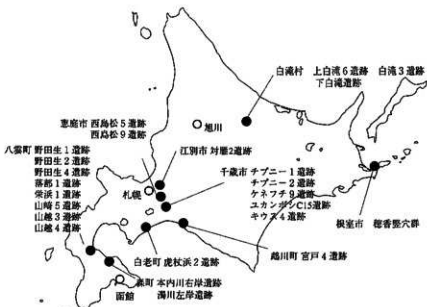
早期前葉から中頃にかけての貝殻土器、条痕土器は西島松9、虎杖浜2、栄浜1、野田生2遺跡で出土している。早期後半の土器・石器はチブニー1、チブニー2、ケネフチ9、西島松5、西島松9、宮戸4の各遺跡で認められ、宮戸4、西島松5遺跡では住居跡とみなされるものが調査されている。穂香整穴群では早期の石器が発見された。

(前期)

前期前半の土器片の出土する遺跡は宮戸4、ケネフチ9、西島松5遺跡にあり、宮戸4遺跡では、土偶?が出土している。前期後半の貝塚、盛土遺構、住居の跡とみなされるものは虎杖浜2遺跡で調査された。西島松5、濁川左岸遺跡でも住居跡が発見されている。

(中期)

宮戸4、野田生1、野田生2、落部1、栄浜1、本内川右岸、濁川左岸、西島松5、西島松9遺跡で調査され、野田生1、野田生2遺跡、落部1、栄浜1、西



平成13年度 発掘調査遺跡の位置

高松5、西高松9遺跡ではこの時期の住居跡が知られた。

(後期)

チブニー1、宮戸4、穂香、野田生1、落部1、栄浜1、本内川右岸、濁川左岸、ケネフチ9、西高松5遺跡で調査されている。栄浜1、濁川左岸遺跡では前葉、野田生1遺跡では中～後葉の集落が知られ、西高松5遺跡には後期から晩期に及ぶ盛土遺構が存在した。穂香では初頭の時期のクマの動物意匠のある土器が発見された。

(晩期)

チブニー1、チブニー2、宮戸4、対雁2、落部1、栄浜1、西高松5、西高松9遺跡で調査されている。住居跡などは知られないが、対雁2遺跡では後葉の時期の多数の焼土とビッドが検出されている。

縄縄文時代

宮戸4遺跡ではスレート製の石織が出土し、野田生1、野田生2、栄浜1、濁川左岸遺跡で前期の土器が発見され、墓や焼土などの遺構が調査されている。落部1遺跡では後期の後北C₂式土器が出土した。

擦文時代

チブニー1、宮戸4、穂香、栄浜1、西高松5、西高松9遺跡で調査されている。チブニー1遺跡では、竪穴住居を伴わず、多くの焼土と遺物が出土した。穂香竪穴群では、擦文時代終末期の竪穴住居跡の一群が調査されている。

中・近世

チブニー1、ケネフチ9遺跡で調査された。

整理作業・報告書作成作業

キウス4遺跡、ユカンボシC15遺跡の資料の整理作業は前年に引き続き実施されている。このうち今年度に「ユカンボシC15遺跡(5)」の報告書の刊行を予定している。これらの遺跡の資料の整理作業はなお次年度へ続く。また八雲町山崎5、山越3、山越4、野田生4遺跡の報告書作成作業が行われている。

○平成13年度の発掘調査

事業委託者	原因工事	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	時代
札幌開発建設部	一般国道337号新千歳空港関連工事	チブニー1	千歳市	4,360	新石器
		チブニー2		450	
室蘭開発建設部	一般国道36号登別延伸工事(虎杖沢工区)	虎杖沢2	白老町	2,010	H11から継続
		宮戸4	稲田町	5,310	H12から継続
網走開発建設部	一般国道44号根室道路工事	穂香竪穴群	根室市	8,000	新石器
		上白滝6	白滝村	670	新石器
網走開発建設部	一般国道450号白滝丸瀬布道路工事	白滝3		2,900	新石器
		F白滝		90	新石器
		白滝遺跡群			縄縄文遺
石狩川開発建設部	石狩川改修対策橋梁工事	対雁2	江別市	1,500	H11から継続
日本道路公社 北海道支社	北海道縦貫自動車道(七飯～長万部)建設工事	野田生1	八雲町	8,476	H12から継続
		野田生2		2,186	H12から継続
		落部1		5,471	新石器
		栄浜1		21,700	H12から継続
		本内川右岸	森町	2,746	新石器
		濁川左岸遺跡		1,300	新石器
		山崎5・山越3	八雲町		整理作業
		山越4・野田生4			整理作業
		キウス4	千歳市		整理作業
		ユカンボシC15			整理作業
札幌土木建築所	道庁道庁道分機特設1機工事	ケネフチ9	千歳市	320	新石器
		西高松5	恵庭市	3,123	H11から継続
		西高松9		1,800	新石器
				72,412	

北海道史略年表

本州の時代区分	年代 (西暦)	北海道の時代区分		H.13調査遺跡の主な時期	
明治～平成	A.D.1900	(近代・現代)			
江戸時代	A.D.1600	近世	アイヌ文化期	チブニー 1	
室町時代	A.D.1300	中世		ユカンボシC15	
鎌倉時代	A.D.1200				
平安時代		擦文時代		穂香堅穴群 柴浜 1 チブニー 1 宮戸 4	
	A.D. 800	オホーツク文化期			
奈良時代	A.D. 600				
古墳時代	A.D. 400	縄文時代		西島松 5 西島松 9	
弥生時代	B.C. 300	縄文時代	晩期	野田生 1 野田生 2 落部 1 柴浜 1 濁川左岸	
	B.C. 1000			後期	対履 2 チブニー 1 チブニー 2 宮戸 4 落部 1 柴浜 1 野田生 4
	B.C. 2000				中期
	B.C. 3000		前期		
	B.C. 4000			早期	
	B.C. 8000				虎杖浜 2 西島松 5 ケネフチ 9 宮戸 4
	B.C. 12000		草創期	宮戸 4 ケネフチ 9 濁川左岸 西島松 5 西島松 9	
	B.C. 20000			上白滝 6 虎杖浜 2 柴浜 1 野田生 2	
旧石器時代	B.C. 20000		旧石器時代		白滝遺跡群

2 調査遺跡

チブニー1遺跡 (A-03-277)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央1018-5

調査面積：4,360㎡

発掘期間：平成13年5月7日～10月31日

調査員：佐川俊一、笠原 興、富永勝也、山中文雄

遺跡の概要

遺跡は、千歳市の市街地から北東へ約6km、馬追丘陵の西側斜面を流れるチブニー川の左岸、標高約18～22mに位置している。明治29年発行の北海道仮製5万分の一図では、河川名がチブエとなっており、船 (chip) に関係する地名であると考えられる。

調査区はほぼ平坦な台地部分と、チブニー川に向かう緩斜面、さらに河岸の河道跡から形成されている。チブニー川を挟んだ対岸にはチブニー2遺跡がある。基本土層は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：樽前a降下軽石、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：樽前c降下軽石、Ⅴ層：黒色土、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：恵庭a降下軽石起源のローム、Ⅷ層：恵庭a降下軽石である。河道跡はチブニー川の氾濫等によって堆積した砂やシルト質の層が見られる。遺物包含層は主にⅢ層 (第Ⅰ黒色土) とⅤ層 (第Ⅱ黒色土) である。

遺構と遺物

検出した遺構はⅢ層から、アイヌ文化期の所産と考えられる焼土2ヵ所、縄文時代の焼土26ヵ所、集石1ヵ所。また、Ⅴ層からは縄文時代の土壇3基、Tピット2基、焼土13ヵ所、炭化物集中1ヵ所を検出した。遺物は縄文時代からアイヌ文化期までのものがあわせて約16,000点出土した。

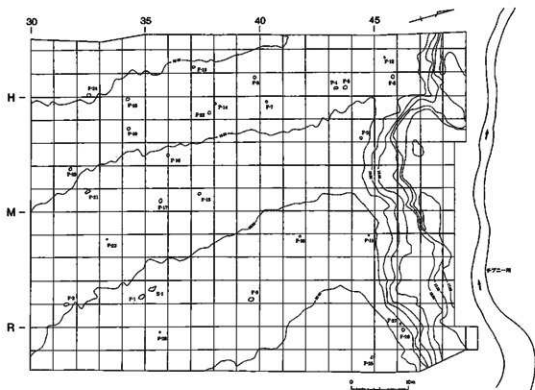
内訳は土器片が約14,000点、石器等が約2,000点である。土器は縄文時代早期から縄文時代におよぶ各時期のものがある。Ⅲ層中で最も多くを占めるものは縄文土器で約7,500点を数える。

Ⅴ層中からは縄文時代後期中葉から後葉にかけての時期と、晩期後葉のものが多い。

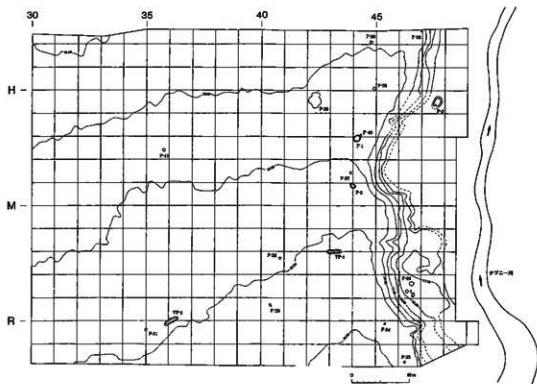
また河道跡からも縄文期から縄文文化期までの遺物が出土しているが、木製品等は出土していない。なお出土した鉄製品14点の保存処理を外注している。



遺跡の位置 (1:50,000)



Ⅲ層遺構位置図（等高線はⅢ層上面）



V層遺構位置図（等高線はV層上面）

遺構数一覧

時代/遺構種別	土 城	Tピット	焼 土	炭化物集中	集 石	柱穴様ピット
アイヌ文化期	0	0	2	0	0	0
縄文時代	0	0	26	0	1	0
縄文時代	3	2	13	1	0	31



調査区全景（南から）



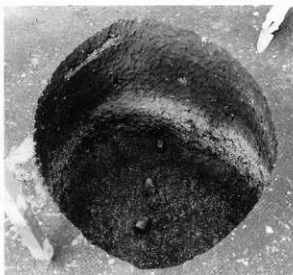
河道跡調査状況（南から）



基本土層断面 (南東から)



撒文土器出土状況 (南東から)



P-1 完掘 (南から)



P-2 完掘 (南東から)



P-3 完掘 (南から)

チブニー2遺跡 (A-03-278)

事業名：一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局札幌開発建設部

所在地：千歳市中央1026-13

調査面積：450㎡

発掘期間：平成13年9月3日～10月31日

調査員：佐川俊一、山中文雄

遺跡の概要

遺跡はチブニー1遺跡の対岸に位置する。調査区は、西へ緩やかに傾斜する台地部分、チブニー川の方へ傾斜するやや急な斜面部分、その下の平坦部分からなる。

調査区内の基本土層はチブニー1遺跡と同じである。遺物はⅢ、Ⅴ、Ⅵ層から出土した。とくに斜面下の平坦部分のⅢ層からは、縄文時代晩期の遺物が多数出土した。

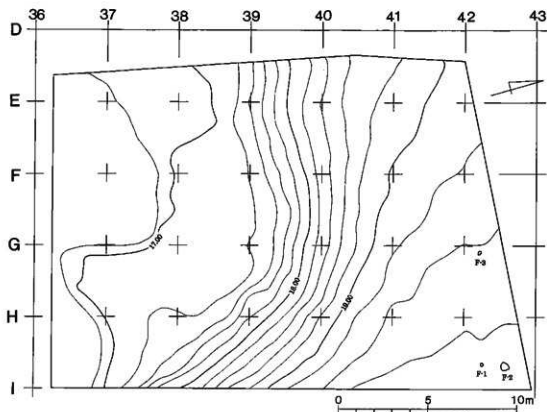
遺構と遺物

遺構は、Ⅴ層で焼土1ヵ所(F-1)、Ⅵ層で焼土2ヵ所(F-2・3)を検出した。

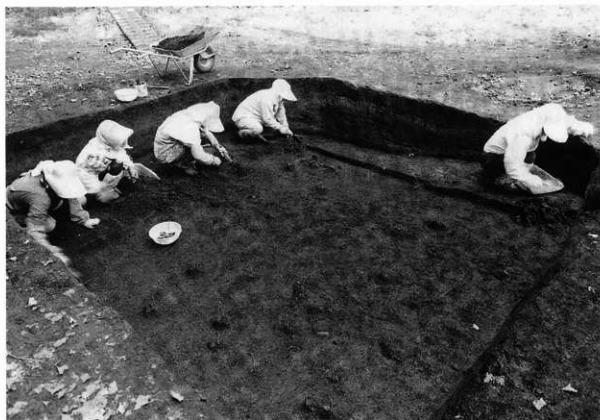
遺物は、土器片約5,800点、石器等約2,100点、合計約7,900点が出土した。このうち縄文時代晩期のものが全遺物の大部分を占める。

土器は、縄文時代早期後半、中期、後期前葉、晩期、擦文時代のものが出土している。縄文時代晩期の土器はⅢ層からの出土がほとんどで、千歳市ママチ遺跡のⅠ・Ⅱ黒層から出土した土器に相当する。Ⅴ・Ⅵ層からの出土は多くないが、その中では縄文時代早期の東剣路Ⅲ式土器が比較的多い。

石器はⅢ層で石鏃、スクレイパーが多く出土している。石斧や礫石器は数点しか出土していない。他に矢柄研磨器が出土している。Ⅴ・Ⅵ層ではスクレイパー、すり石等が出土している。



遺構位置図 (等高線はⅤ層上面)



III層調査状況（斜面下の平坦部分 東から）



完掘状況（南から）

こほろぼ
虎杖浜2遺跡（J-10-1）

事業名：一般国道36号登別拡幅工事（虎杖浜工区）用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：白老郡白老町字虎杖浜333-6ほか

調査面積：2,010㎡

発掘期間：平成13年5月9日～10月31日

調査員：佐藤和雄、土肥研晶、末光正卓

遺跡の概要

遺跡は、白老町西端部、登別市との境界に近い、アヨロ川とボンアヨロ川に挟まれる、太平洋に突き出した標高約50mの台地上、国道36号線の虎杖浜トンネルのほぼ真上に位置する。遺跡の存在は古くから知られており、昭和52年の白老町教育委員会による分布調査では、A・B2ヵ所の貝塚を有する縄文時代前期の大規模な集落跡の存在が確認されている。調査区内に位置するA地点貝塚は、昭和33年の虎杖浜トンネルの天井陥没事故に伴う修復工事の際にその土砂が利用されるなど、破壊が進んでいたが、分布調査の時点では、層厚20cm内外で約155㎡の広がりをもつ貝塚であることが確認されていた。現況は、斜面に多数の自然遺物が散布している状況が確認されたが、平成12年に行ったトレンチ調査で、完全に破壊されていることを確認し、遺物回収地区となった。

遺構と遺物

遺跡の調査は平成9年度に白老町が、平成11年度からは北海道埋蔵文化財センターが調査を行い、今年度で4期目となる。今年度の調査区は町道伏古別1番線を挟むA・B・C地区の3ヵ所に分かれる。今年度検出された遺構には、竪穴住居跡10軒、土壇7基、焼土7ヵ所のほか、貝塚を含む盛土がある。竪穴住居跡はB地区周辺に集中して検出され、今年度までに28軒がほとんど切り合わない状況で検出された。これらの竪穴には、地床伊が無く、砂の堆積が見られる例が多い。A地区の北隅には盛土遺構が確認され、その中にはA貝塚の一部が破壊を免れ調査区外にも広がることを確認された。

出土遺物は、土器が2,488点、石器は29,508点で、土器は縄文時代前期の円筒土器下層a式併行のものが中心で、出土量が少ないことが特徴である。

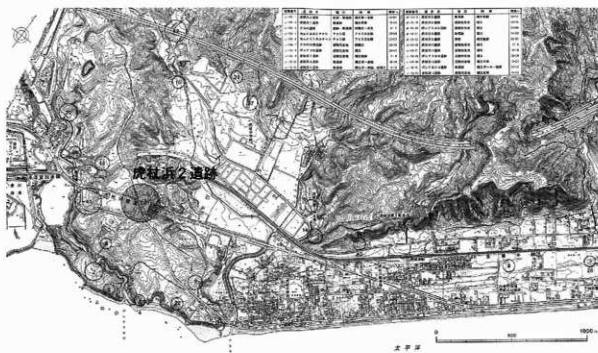
視乱貝層の水洗選別作業では自然遺物がコンテナで約500箱回収され、一部を選別した結果、わずかな土器や石器のほかは、ヤマトシジミを主体とする貝類、ウニ類が多く、この他に魚類、海獣骨、陸獣骨のほか、人骨や骨角器も見つかっている。



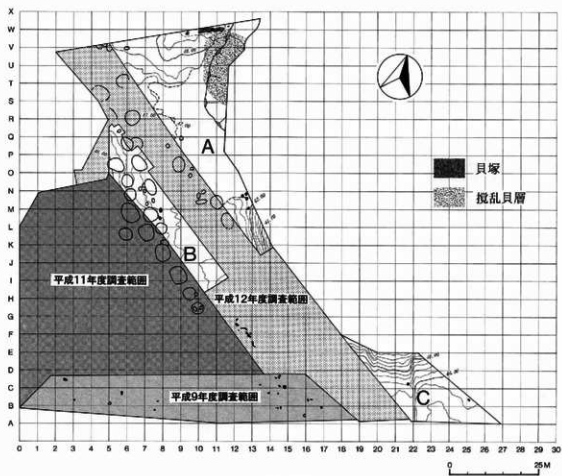
竪穴住居跡発掘状況



貝塚遺物出土状況



遺跡位置図



遺構位置図

みやと
宮戸 4 遺跡 (J-14-40)

事業名：日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局室蘭開発建設部

所在地：勇払郡鶴川町宮戸182の1ほか

調査面積：5,310㎡

発掘期間：平成13年5月7日～10月31日

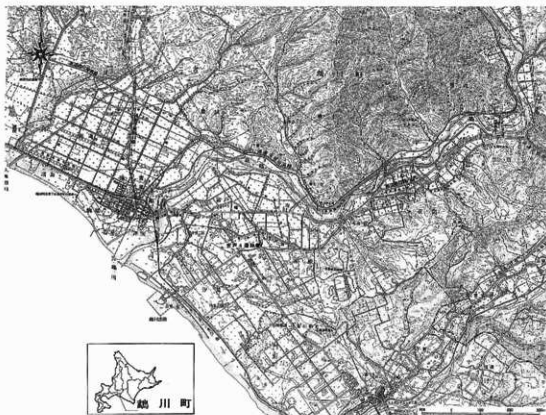
調査員：西田 茂、鎌田 望、芝田直人、柳瀬由佳

遺跡の概要

遺跡は、JR鶴川駅の東南東約5kmに位置している。鶴川市街地からは一級河川鶴川を隔てたところであり、その支流イモッペ川の上流域にあたる。遺跡の立地は、標高50mほどの台地を開析して、略南から北に流れているイモッペ川が、標高20mほどの平坦部にさしかかる辺りである。

今年度は遺跡調査の2か年目である。高速道路の建設計画に基づき「町道米原2線」に接した区域とイモッペ川の改修区域とを発掘した。町道に接する区域は、標高19mから27mの斜面（樹林）部分であり、河川改修区域は標高20mから22mの平坦（水田）部分である。平坦部分では、水田造成時に遺物包含層が削平され消失したところがあり、さらに地域住民の使用している簡易水道2本の埋設時に包含層が攪乱を受けている。これら最近の人為的攪乱範囲を除くと、斜面部分、平坦部分ともに17世紀中葉の降下火山灰（有珠b降下火山灰と樽前b降下火山灰）に40～60cmほど覆われており、縄文時代の遺物包含層の残存状況は比較的良好であった。

斜面部分での堆積土層の概略は、17世紀中葉の降下火山灰（白色）の約60～80cmほどは黒褐色土・黒色土であり、さらにその下は褐色土・黄褐色土（礫を多く含む）である。縄文時代早期の土器、



遺跡位置図

この図は国土地理院発行の地形図、1：50,000「富川」（NK-54-9-13、昭和63年3月30日発行）と、鶴川町役場の1：50,000「鶴川町全区」（承認番号 平10、道複 第874号）を合成したものである。

石器等は褐色土・黄褐色土の10cmの深さまでに包含されている。

発掘の進展に伴って、遺跡範囲の拡大が推測されたので北海道教育委員会の指導のもと試掘調査を行った。これにより平坦（水田）部分、斜面（樹林）部分ともに遺物包蔵地が広がっていることが判明した。一部については発掘をおこなったが、大部分は次年度以降の調査範囲となる。

遺構と遺物

検出した遺構は、竪穴住居跡1、Tピット13、焼土26、剥片集中1である。これらの遺構はすべて斜面（樹林）部分にある。住居跡は斜面部分の沢地形の中、標高20mにある。長径5mほどの略円形で、掘り込みが浅く、明瞭な炉跡や柱穴をもたない。床面から検出された土器片から判断すると、縄文時代早期後半（コッタロ式土器）の遺構と考えられる。

Tピットは、平面形により、楕円形のものと同長楕円形のものに分けられる。楕円形のは比較的深く（1.3～1.6m）掘り込まれており、長楕円形のは比較的浅い（1.0～1.3m）ものである。これらのTピット相互の連絡を推定すると、楕円形のは斜面地形を沢に沿うように分布しており、一方長楕円形のは沢地形を横切るように列をなしている。Tピット同士の切り合いは確認されなかった。

焼土は、検出された土層面ならびに出土遺物から判断すると、その大半は縄文時代早期後半の時期に形成されたものである。同じような判断基準に照らして縄文時代前期前半、縄文時代中期後半とみなされるものもある。

剥片集中は、長径5m弱の範囲に黒曜石の残核片、剥片、碎片が1,600点ほど検出されたもの。このなかには製作途中の破損品とみなされる石鏃片9点もある。ここは素材の黒曜石を打ち割り、剥片を加工し石鏃を製作したところであろう。

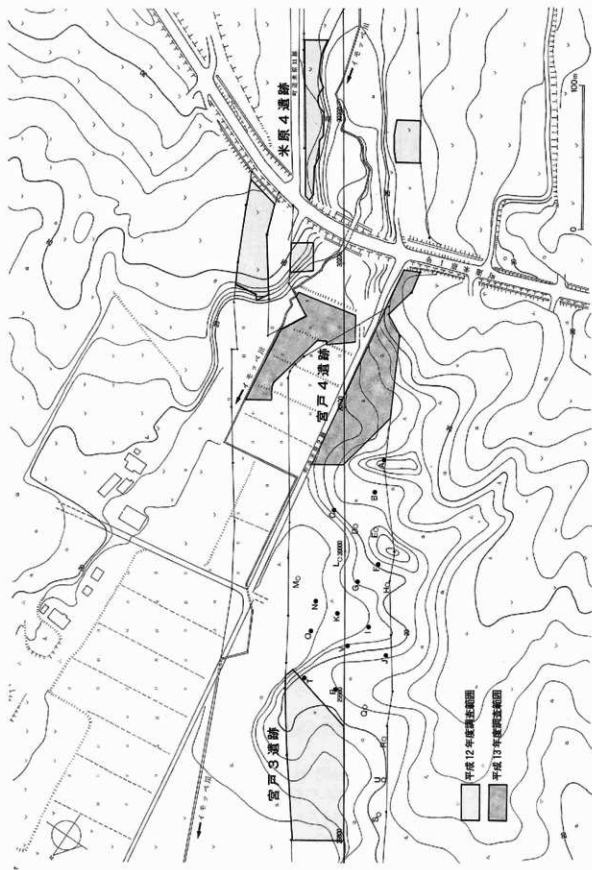
平坦部分では、縄文時代にあってもいくたびかイモツベ川の流路が変化した痕跡が認められ、今回の調査範囲からは明瞭な遺構は検出されなかった。

遺物は、土器22,650点、石器等33,980点、合計56,630点が出土した。縄文時代の遺物包含層の広い範囲にわたって、多量の礫（14.3万点）が含まれていたが、大・中・小の全点を水洗いし詳細に観察した結果、その大多数は自然営力によるものと判断した。土器は縄文時代の高坏1個体分のほかは縄文時代早期、前期、中期、後期のものである。型式的な特徴が判明するものは、東銅路Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東銅路Ⅳ式、網文式、静内中野式、植苗式、天神山式、柏木川式、タブコブ式などである。出土状態は、時期の先後関係が包含土層の上下として捉えられるものが多い。

石器は石鏃、石槍、石錐、つまみ付きナイフ、石斧、たたき石、すり石、砥石、台石などがあり、これらの石器の破損品、製作途中での残片なども多い。これらの石器等のほとんどは、縄文時代早期、前期、中期のものとみなされる。石鏃、つまみ付きナイフでは、検出層位およびその形態的な特色からみて、縄文時代早期後半のもの、縄文時代前期前半のものと判断できるものがある。さらに石鏃には、その検出層位、形態的な特色から判断して、縄文時代後期、晩期、続縄文時代のものとみなされるものもある。

土偶の一部かとみなされる、いくぶんのふくらみ部を持つ板状の土製品は、縄文時代前期の土器の出土層位から検出されたものである。

斜面（樹林）部分での試掘調査の試掘穴19ヵ所（A～S）は、その位置を略記してある。黒点は遺物などが検出されたところである。このうちTからは写真に示したような蛇紋岩（カンラン岩？）を素材とした石製品が出土した。石斧の形態を模したものであり、擦り切りの技法が読み取れることから、時期は縄文時代早期の可能性が高い。





調査風景



TP-10 調査状況



TP-1 完掘



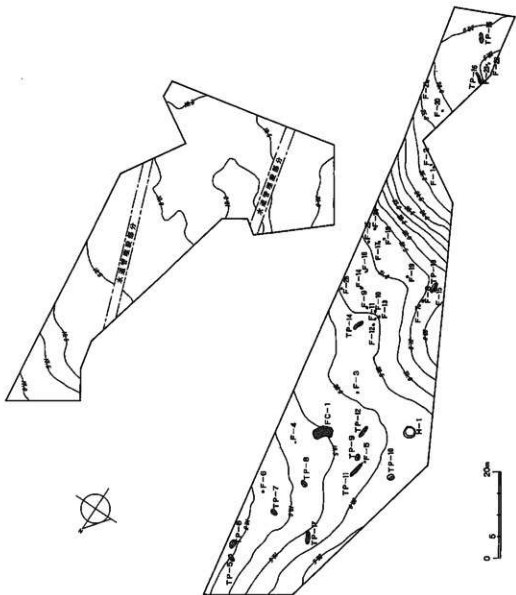
遺物出土状況（網文式土器）



遺物出土状況（捺文土器）

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30

E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
S
T
U
V
W
X
Y
Z
AO
BO
CO



遺構位置圖



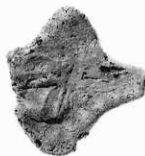
作業風景 (来年度調査区の養生)



調査風景 (B調査)



遺物出土状況 (B調査、石製品)



土偶

穂香竪穴群 (N-01-34)

事業名：一般国道44号根室道路工事に伴う穂香竪穴群遺跡発掘調査

委託者：北海道開発局釧路開発建設部

所在地：根室市穂香175番地ほか

調査面積：8,000㎡

発掘期間：平成13年5月7日～10月26日

調査員：越田雅司、村田 大、広田良成

遺跡の概要

遺跡は、根室市中心部から南西へ約5km、穂香川左岸の西から東へ張り出した標高約9～13mの舌状台地上に位置する。現況は牧草地と笹原の原野で、南側の斜面の一部に雑木が生えている。據文時代と考えられる竪穴状の凹みが、台地上と海からの冷たい北風を避けた南側の斜面に確認できる。

周辺には国道を挟んだ北側の海岸段丘上に靉茂尻ポントマリ竪穴群、靉茂尻東竪穴群があり、穂香川支流の対岸、南側台地上には穂香3竪穴群がある。また、遺跡から根室市街地方へ約1.5km行った台地上に国指定史跡の西月ヶ岡竪穴群があり、約300軒の竪穴住居跡の凹みが確認されている。

遺跡は、昭和初期に伊藤初太郎が分布調査を行い、『考古学上の根室の遺物と遺跡』に10軒ほどの竪穴が図面に記載されている。1973年の北地文化研究会の分布調査報告書『根室市市域分布調査報告書』では38軒が記載され、そのほとんどが據文期のものと報告されている。1993年に根室市教育委員会が発掘調査を行い、5軒の竪穴住居跡が発見された。この調査の際、周辺の地形測量とともに竪穴の分布状況の調査が行われ、調査された5軒の竪穴住居跡を含め62軒が確認されている。今回の調査範囲内にはそのうちの約30軒が含まれ、今年と来年の2ヵ年で調査を行う予定である。

基本土層は、Ⅰ層：表土・耕作土、Ⅱ層：黒色土、主に據文時代の遺物包含層、Ⅲ層：黒褐色土、主に縄文時代の遺物包含層、Ⅳ層：黄褐色土、摩周火山起源の火山灰層 (Ma-g-k)、約7,000年前に降下（非常に崩れやすい砂状の火山灰のため崩落して、竪穴住居跡内に流れ込んでいる）、Ⅴ層：黒色土、縄文時代早期末以前の遺物包含層、Ⅵ層：黄褐色ローム層（多くの竪穴住居跡はこの層まで掘り込んで床面としている）である。

遺構と遺物

遺構は據文時代の竪穴住居跡13軒、焼土4ヵ所、集石1ヵ所、縄文時代の土壇2基を検出した。竪穴住居跡は、大きく分けて三つのタイプが見られた。平面形が一辺6～10mの比較的大型の方形で、カマドと炉があるもの (H-6・11・13・14)、平面形が一辺4m程の小形の方形で、炉だけのもの (H-15・16)、平面形が長方形で炉だけのもの (H-7・8・10・17) である。カマドがある5軒の住居跡は、調査範囲外におよび全体が明らかではない1軒 (H-18) を除き、カマド反対側の2本の柱穴の内側に、小規模の炉が見られる。また、H-6・8・14では周堤状の掘上げ土が良好な状態で確認された。さらに、竪穴住居跡に伴うものかどうか不明であるが、H-11の床面近くで約60点程のガラス玉が、金属製品、ヒスイの勾玉などとともに出土した。上層からの明確な掘り込みなどは確認できなかったが、墓の可能性を含め、今後慎重に検討しなければならない事例である。竪穴群の時期は出土した土器から、據文時代の終わり頃と考えられる。

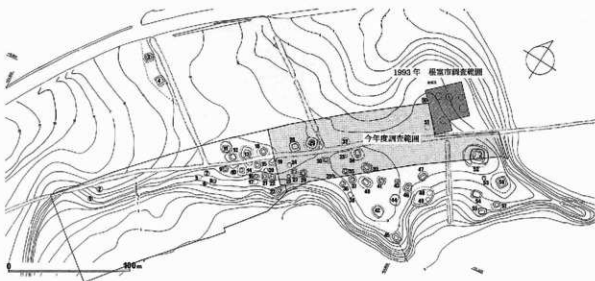
遺物は約8,000点が出土し、據文土器、刀子などの鉄製品のほかに、大小の棒状礫が大部分を占める。また、調査区西側の斜面部分で、縄文時代中期末～後期初頭の北筒式の土器や黒曜石製の石器数点が出土し、さらにⅤ層の黒色土からは、縄文時代早期と考えられる蛇紋岩製の石斧が1点出土した。



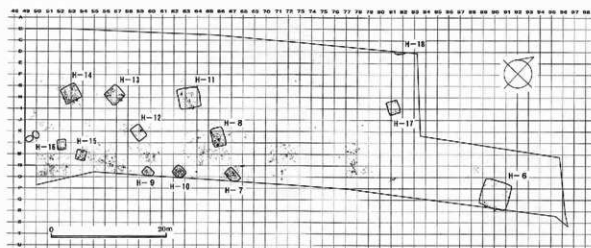
遺跡の位置と周辺の壑穴群

I層	表土
II層	黒色土
III層	黒褐色土
IV層	Ma-g~k
V層	黒色土
VI層	黄褐色ローム層

基本土層模式図



調査範囲（根室市教育委員会 1994に加筆）



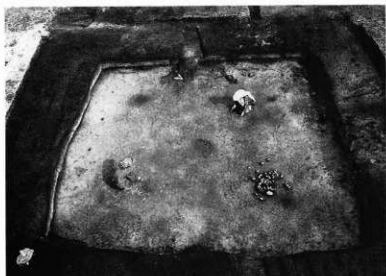
壑穴住居跡と遺物の分布



遺跡遠景 (西から)



H-6 調査状況 (西から)



H-11 (北西から)



H-11 玉類出土状況 (西から)



H-8 集石出土状況 (北から)



北筒式土器出土状況 (東から)



調査状況 (南から)

しろたき
白滝遺跡群

事業名：一般国道450号白滝丸瀬布道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
 委託者：北海道開発局網走開発建設部
 調査面積：3,660㎡（3遺跡合計）
 発掘期間：平成13年7月16日～9月14日
 整理期間：平成13年4月2日～平成14年3月29日
 調査員：長沼 孝、鈴木宏行、直江康雄

調査遺跡一覧

遺跡名（道教委登録番号）	所在地	調査面積（㎡）
上白滝6遺跡（I-20-89）	紋別郡白滝村字上白滝123	670
白滝3遺跡（I-20-36）	紋別郡白滝村字白滝106外	2,900
下白滝遺跡（I-20-23）	紋別郡白滝村字下白滝99-1	90
合計		3,660

整理遺跡一覧

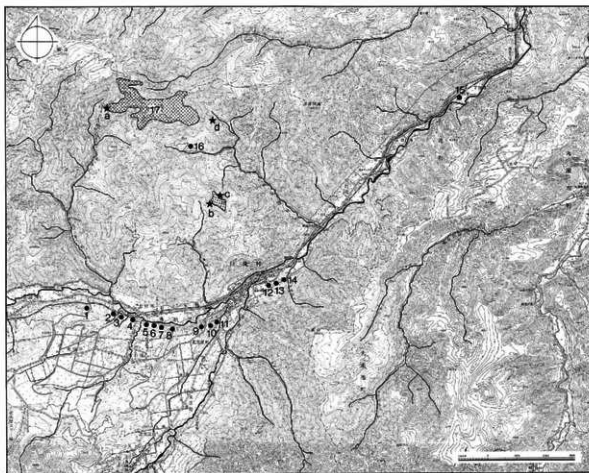
遺跡名（道教委登録番号）	所在地	遺物点数(点)
奥白滝11遺跡（I-20-65）	紋別郡白滝村字上白滝52-2	2,376
服部台2遺跡（I-20-13）	紋別郡白滝村字奥白滝18-3	798,030
奥白滝1遺跡（I-20-50）	紋別郡白滝村字上白滝183-2、183-5	831,924
上白滝8遺跡（I-20-91）	紋別郡白滝村字上白滝181-4、182-2、182-3	1,349,748
上白滝5遺跡（I-20-88）	紋別郡白滝村字上白滝123-3	86,070
上白滝6遺跡（I-20-89）	紋別郡白滝村字上白滝123	1,600
白滝第30地点遺跡（I-20-6）	紋別郡白滝村字白滝382-4	4,627
白滝8遺跡（I-20-58）	紋別郡白滝村字白滝146-1、146-2	4,036
白滝18遺跡（I-20-92）	紋別郡白滝村字白滝145、139-1	47,853
白滝3遺跡（I-20-36）	紋別郡白滝村字白滝106外	41,281
下白滝遺跡（I-20-23）	紋別郡白滝村字下白滝99-1	1,010
合計		3,168,555

遺跡群の概要

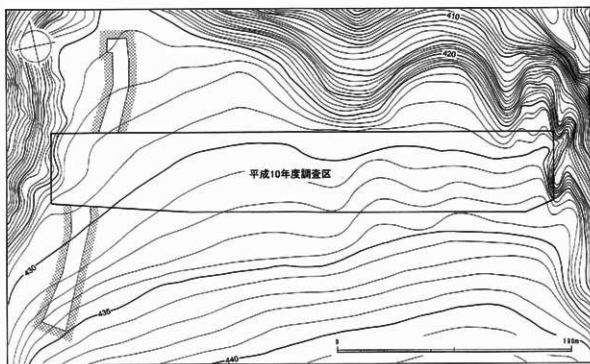
白滝村は、北海道の屋根といわれる大雪山系の東北山麓にあり、市街地の北西約6kmには国内有数の黒曜石産出地として知られる赤石山がある。村内を東西に流れる湧別川とその支流の支湧別川の河岸段丘上には旧石器時代の遺跡が多数所在し、それらは「白滝遺跡群」と総称されている。特に赤石山に通じる八号沢川と湧別川の合流点付近には、白滝第13地点遺跡をはじめ服部台、白滝第32地点、白滝第33地点遺跡など学史的に有名な遺跡が集中している。また、1997年には新たに約20万㎡が国指定史跡に追加され、すでに指定済みの「白滝遺跡」（白滝第13地点遺跡）と合わせて「白滝遺跡群」として名称変更された。

今年度調査した3ヵ所の遺跡は全て湧別川の河岸段丘上に立地しているが、下白滝遺跡は平成7年以來調査してきた奥白滝・上白滝・白滝地区より下流域での初めての調査であった。

基本土層は上白滝6遺跡・白滝3遺跡ではⅠ層：表土・耕作土、Ⅱa層：褐色粘質土、Ⅱb層：灰



赤石山（原石山）と遺跡の位置



上白滝 6 調査区域図

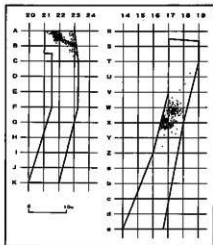
白色粘質土、Ⅱc層：赤褐色砂質土、Ⅲ層：赤褐色砂質土であるが、白滝3遺跡の北東部ではⅡa層下位に赤褐色砂質土・礫混じり砂質土が確認された。下白滝遺跡ではⅠ層が厚く堆積し、その下に礫混じり砂層が確認された。

3ヵ所の遺跡全体で出土した遺物の総数は43,891点、全て石器で上白滝6遺跡の北側地区・白滝3遺跡は旧石器時代、上白滝6遺跡の南側地区・下白滝遺跡は縄文時代のもと考えられる。

上白滝6遺跡の調査

遺跡は白滝市街の西方約3.3km、湧別川と八号沢川の合流点から約2km下流の湧別川右岸段丘上に立地し、標高は約425～435m、湧別川との比高は30～40mである。平成10年度の調査では、石刃鎌を含む石器群のブロック1ヵ所、有舌を含む尖頭器石器群のブロック2ヵ所から5,062点の遺物が出土した。

今年度は、前回の調査区西側から約8m幅で南北に隣接する地区の調査を行った。遺物総数は1,600点、そのうち1,063点の出土位置を計測した。北側地区ではA-21・22区を中心とした尖頭器を含む石器群のブロック1ヵ所が、南側地区ではW-16・17、X-16区を中心とした石刃鎌を含む石器群のブロック1ヵ所が確認された。定形的な石器は前者からは尖頭器・掻器が、後者からは石刃鎌・石鎌・尖頭器・両面調整石器・掻器・つまみ付きナイフ・削器・石核が出土している。石材は南側地区の頁岩1点を除き全て黒曜石であるが、南側地区では他の遺跡ではあまり利用されない細かい気泡が多く含まれる梨肌の黒曜石が多い。石刃鎌・石刃等の石器類が全て気泡を含まない黒曜石製で、それぞれ単体で搬入されているのと対照的に梨肌の黒曜石は剥片と石核のみで構成され、石器製作が行われた痕跡がみられる。石刃鎌を含む石器群は平成10年度調査区や谷を挟んだ西側の上白滝5遺跡でも確認されているが、今回発見された石刃鎌石器群はこれらに比べ量的にまとまった資料である。



上白滝6 遺物分布図

白滝3遺跡の調査

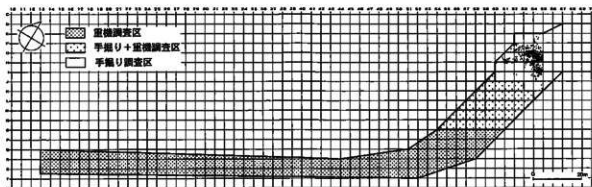
遺跡は、白滝市街に隣接し、湧別川と支湧別川の合流点の南東側、湧別川右岸段丘上に立地している。標高は約370～380m、湧別川との比高は約20～30mである。

調査区のうち西側の3分の2は耕作による攪乱が著しく重機の掘り上げによる遺物の採集を行い、残りの東側は手掘りの調査を行った。遺物総数は41,281点、そのうち1,010点の出土位置を計測した。重機調査区ではR16～21区、R33～36区、R50～53区を中心とした3ヵ所の遺物集積域が確認され、有舌尖頭器・尖頭器・彫器・掻器・石刃核・石核が出土した。手掘り調査区ではF～H-63・64区を中心として段丘の縁に遺物の分布が認められ、尖頭器・小型のものを含む舟底形石器・彫器・掻器・錐形石器・石刃核・石核が出土した。

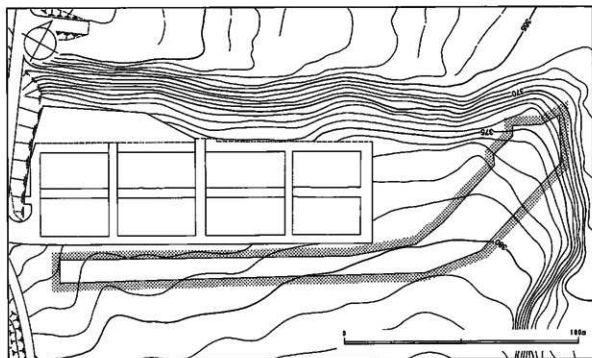
下白滝遺跡の調査

遺跡は、白滝市街の北東約9.5km、丸瀬布市街とのほぼ中間で、村名の由来になっている「白滝」の下流に位置している。標高は約270m、湧別川との比高は約7mである。奥白滝・上白滝・白滝地区の遺跡とは異なり山が両岸に迫る湧別川左岸の狭い段丘上に立地している。

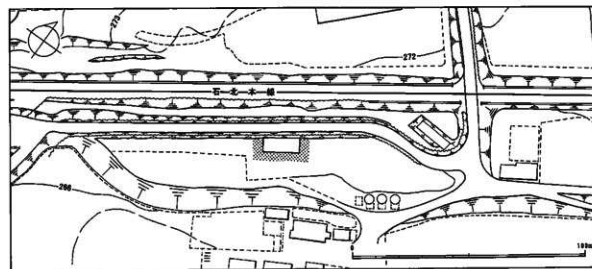
調査区は耕作による攪乱が著しく重機の掘り上げによる遺物の採集を行った。遺物総数は1,010点、全て石器で、縄文時代のもと考えられる。定形的な石器は石鎌・尖頭器・掻器・石核がある。



白滝3 遺物分布図



白滝3 調査区域図



下白滝 調査区域図



上白滝6 北側地区調査状況（北西より）



上白滝6 南側地区調査状況（北東より）



上白滝 6 南側地区遺物出土状況



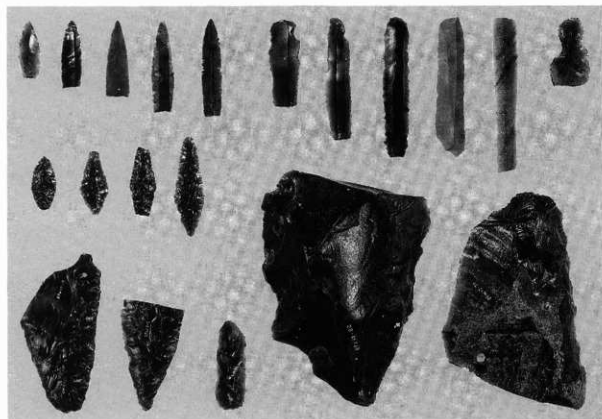
上白滝 6 石刃鎌



上白滝 6 石刃



上白滝 6 石鎌



上白滝 6 南側地区出土遺物



白滝3 調査状況 (南西より)



白滝3 遺物出土状況



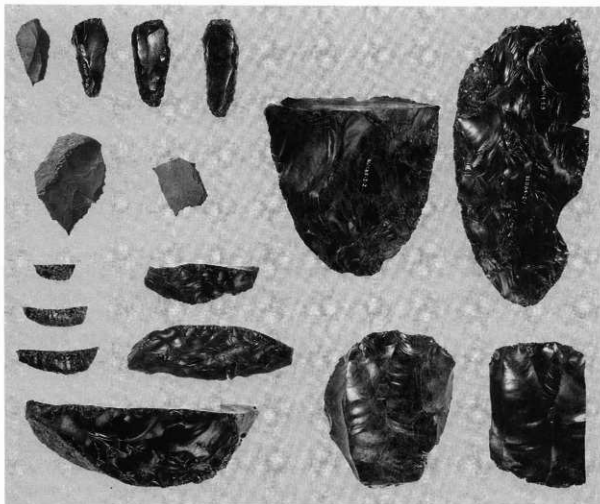
白滝3 彫器 (頁岩)



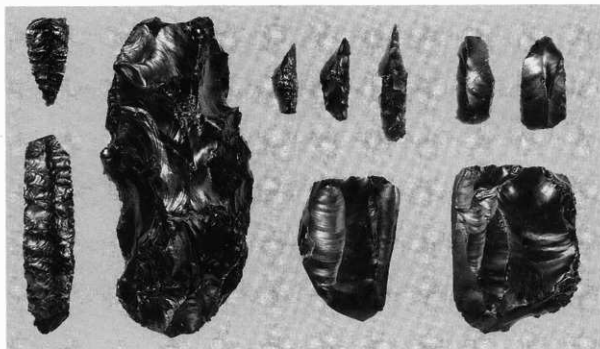
白滝3 小型舟底形石器



白滝3 石核



白滝 3 手掘り調査区出土石器 (1/2)



白滝 3 重機調査区出土石器 (1/2)

白滝遺跡群の整理

今年度は昨年度までに調査した服部台2・奥白滝1・上白滝8・上白滝5の4遺跡の二次整理作業と、今年度調査した上白滝6・白滝3・下白滝の3遺跡の一次整理作業を行った。二次整理の状況を遺跡別に説明すると、図化・データ整理は今年度報告の奥白滝1（平成9・10年度調査分）・上白滝5遺跡を、石器接合は来年度以降報告予定の服部台2・上白滝8遺跡を中心に行っている。

夏期に集中的に整理作業を行った奥白滝1遺跡（平成9・10年度調査分）は、約64万点の遺物が出土し、平面分布から44ヵ所の石器ブロックが確認されている。それらは特徴的な石器類から従来「台形様石器」・「小型不定形剥片石器」などと呼ばれている、剥片の一部に微細な剥離が施されたものを含む石器群（仮称「白滝I群」）、「紅葉山型（置戸型）」と呼ばれる円錐形の細石刃核を含む石器群、尖頭器を主体とする石器群の大きく三つの石器群に分けることができる。ここでは「紅葉山型」細石刃核を含む石器群について説明する。

「紅葉山型」細石刃核を含む石器群は、4ヵ所のブロックに分けられ、定形的な石器として細石刃・石刃・掻器・彫器・削器・錐形石器・細石刃核・石刃核・石核がある。接合作業によって石器製作工程が分かる個体が多く得られ、それらを観察した結果、石刃剥離と細石刃剥離が、打面再生・調整を繰り返しながら一連の作業の中で行われていることが分かった。これらはブロック間で多くの接合関係がみられ、そのうち2個体（接合資料1003・接合資料1013）が、沢を挟んだ西側、直線距離で約350m離れた服部台2遺跡の「紅葉山型」細石刃核を含む石器群中の遺物と接合することが確認された。興味深いことにこの2個体では遺跡間接合の状態が異なっている。

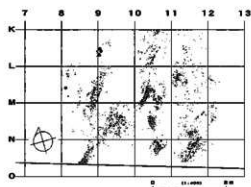
接合資料1003は、奥白滝1遺跡の47個体（点取り遺物52点、Ⅱ層一括10点、Ⅰ層一括6点）と服部台2遺跡の9個体（点取り遺物3点、Ⅰ層一括7点）を合わせた56個体、石刃・縦長剥片・打面再生剥片・剥片・砕片・石核（剥片素材）で構成される。素材はやや角の取れた角礫で、上面と左側面に大きな剥離面のある状態で遺跡に搬入されている。剥離工程をみると、打面再生・調整を行いながら石刃・縦長剥片が石核を周回するように剥離され、途中下方からの剥離も行われる。また、初期段階で剥離された厚手の縦長剥片は、石核の素材となり縦長剥片が剥離されている。奥白滝1資料は外側の石刃・縦長剥片と打面再生・調整剥片で、服部台2資料はその内側に周回するように接合している石刃・縦長剥片である。服部台2資料のすべてが奥白滝1資料の後に剥離されるものであることから、原石の状態に近い角礫が奥白滝1遺跡に搬入され、石刃剥離が行われた後、服部台2遺跡に石刃核が持ち出され、石刃剥離が連続的に行われた可能性が高い。

接合資料1013は、奥白滝1遺跡の20個体（点取り遺物24点、Ⅱ層一括1点、Ⅰ層一括3点）と服部台2遺跡の1個体（点取り遺物2点）を合わせた21個体、石刃・縦長剥片・剥片で構成される。角礫を素材とした横断面が凸レンズ状の両面調整体が遺跡に搬入され、打面再生・調整を行いながら一方方向に後退するように石刃・縦長剥片が剥離されている。服部台2出土の1個体は石刃で、全体のちょうど中ほどに接合していることから、石刃核のブランクである両面調整体が、奥白滝1遺跡に搬入され、石刃剥離を行った後、その中から石刃を選択して服部台2遺跡に持ち出した可能性が高い。なお、両接合資料とも石刃核は出土していないため、さらに搬出されたと考えられる。

このように奥白滝1と服部台2の遺跡間接合は、沢を挟んだ隣接した遺跡のものであるが、当時の人々の移動経路・形態の一端を議論することできる貴重な資料である。「紅葉山型」細石刃核を含む石器群では、遺跡間接合の他にも多様な接合資料があり、素材の選択や遺跡内への搬入状況を含めた石器製作技術を明らかにすることができる。さらに分布状況と重ねて分析することによって当時の人々の具体的な行動を探ることが可能である。

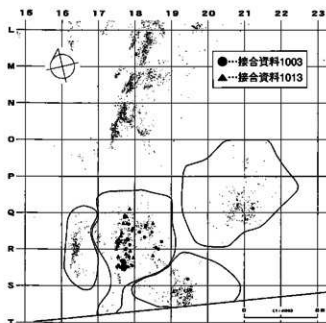
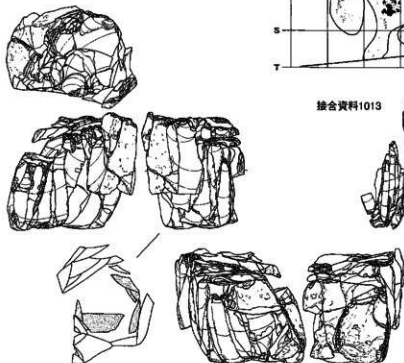


遺跡位置図

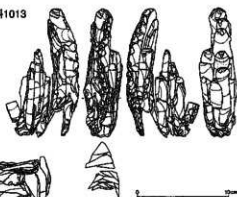


服部台2 (左) と奥白滝1 (右) の遺物分布図

接合資料1003



接合資料1013



※トーン部分は服部台2出土遺物

対雁2遺跡 (A-02-110)

事業名：石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道開発局石狩川開発建設部

所在地：江別市工業町地先（石狩川河川敷緑地内）

調査面積：1,500㎡

発掘期間：平成13年5月7日～10月31日

調査員：三浦正人、鈴木 信、西脇対名夫、吉田裕史洋、酒井秀治

遺跡の概要

遺跡はJR江別駅の北西約4kmの石狩川左岸に位置する。世田豊平川（旧豊平川）との合流地点よりも上流側の石狩川河川敷緑地内であり、標高約8mの微高地に立地する。調査以前に運動公園の造成に伴う均平化を受けている。石狩川の河川改修が本格化する1970年代以前は対雁番屋、樺太アイヌ強制移住地、対雁小学校、榎本牧場などが所在した旧対雁村の中心部がこの付近にあり、江別の歴史を語る上で欠かせない重要な地域である。

昨年の範囲確認調査の結果から遺跡の発掘調査範囲が変更され、要発掘面積は32,500㎡となった。

今年度は遺跡調査の3ヵ年目にあたり、昨年度調査区の西隣1,500㎡の調査を行った。平成11年度の確認調査から判断した遺構・遺物の疎密の状況とは異なり、当初考えられたよりも広い範囲から遺構・遺物が密に検出された。特に155～158ライン付近から多く検出され、遺構・遺物を検出する生活面が薄い間層をはさんで最大14面確認された。出土する遺物は縄文時代晩期後葉のものであり、遺跡はこの時期に形成されたと考えられる。

遺物包含層は世田豊平川（旧豊平川）に向かって落ち込んでいくことが確認され、さらに深部へ続くと思われる。そのため、来年度はさらに深部の調査を行う予定である。

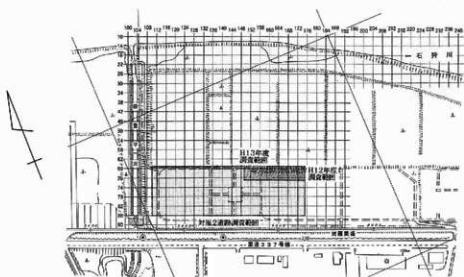


遺跡の位置

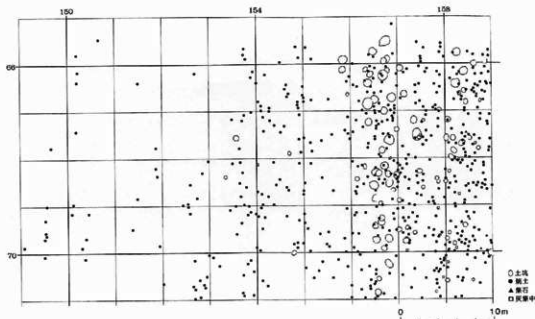
遺構と遺物

遺構は、平成11年度の確認調査で検出したものを含め、土坑102基、焼土543ヵ所、集石8ヵ所等である。遺構の多くは155～159ライン付近に集中して検出された。土坑は礫・礫石器や砂の混入した灰白色の粘土が入っているものがあつたが、多くは遺物を伴わない。明確に墓坑と判断されるものはなかった。焼土は炭化物や骨片などを伴うものや廃棄された焼土が集まったようなものが検出された。また、焼土の周囲に土器を安定させるためと考えられる浅い小穴も検出された。

今年度に出土した遺物は、土器約20,000点、石器等約8,000点、合計約28,000点であり、平成11年度の出土品を含めた総数は約39,700点である。土器は全て縄文時代晩期後葉に属するものである。石器等は石鏃、スクレイパー、たたき石が多く、石錐、つまみ付きナイフ、石斧、砥石、台石などが少量出土している。他にはカンラン岩製の玉、土製の玉等が出土している。石器の石材としては、剥片石器が黒曜石、礫石器が安山岩や砂岩が多い。



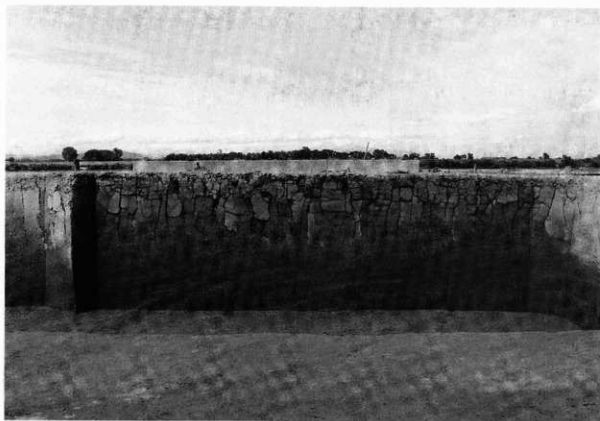
調査範囲図



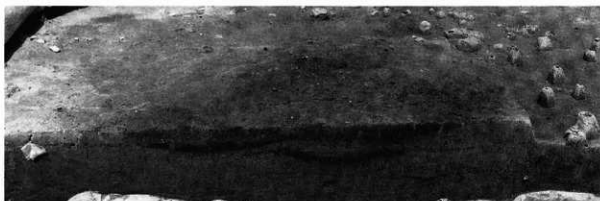
遺構位置図



調査風景（南から）



基本土層（南西から）



焼土の重複状況（上からF-41.47.78.80）（北東から）



P-30 調査風景（北から）



P-49 調査風景（北東から）



ミニチュア土器出土状況（北東から）



石鏃・フレイク出土状況（北から）

野田生1遺跡 (B-16-47)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡八雲町野田生317-6 他

調査面積：8,476㎡

発掘期間：平成13年5月7日～10月31日

調査員：種市幸生、菊池慈人、藤井浩、坂本尚史、福井淳一

遺跡の概要

野田生1遺跡は、八雲町南部の「野田生」地区に位置し、標高約40mの海岸段丘上に立地する。自動車道建設に伴って設定された調査区は段丘を東西に横断するかたちで、東から順にA地区、C地区、B地区が所在する。

調査はA地区及びB地区の一部を昨年度で終了し、今年度は新たにC地区における遺構確認調査と昨年に引き続きB地区遺構集中部の調査を行った。C地区は昨年度の調査結果に基づいてB地区東側の4,820㎡を拡張して設定されたものである。

B地区は弥之助沢川に面した上下二段の段丘面からなり、遺構の集中する部分は上段の緩斜面部にあたる。また、C地区はB地区に連続する段丘の平坦面に位置するが、グリッド60ラインを頂点に東側40ラインにかけてはきわめて緩やかな傾斜が見られた。遺物包含層はB地区同様に駒ヶ岳d火山灰下の黒褐色土（Ⅲ層）が主体で、平均30cmと全体的に浅く、縄文時代後期を中心に中期から統縄文期の遺物が見られた。

遺構と遺物

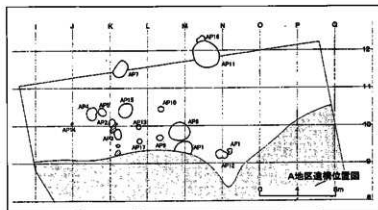
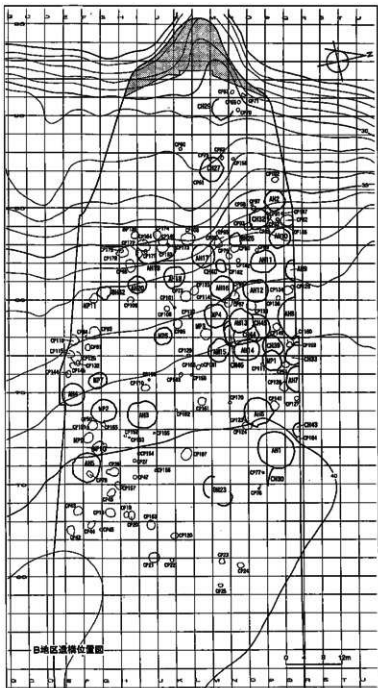
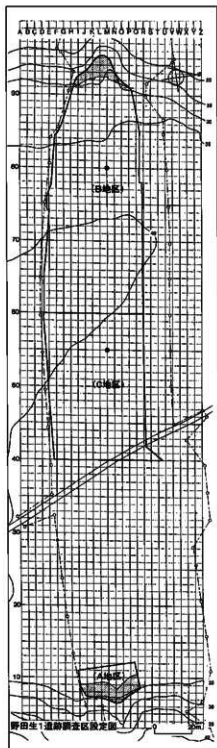
遺構調査は、「明瞭な落ち込みを伴うもの」(A)、「落ち込みのやや不明瞭なもの」(B)、「ローム層面で確認されたもの」(C)、「覆土中に黄褐色ローム土が円形に巡るもの」(M)の4つの確認区分に従って行われた。昨年の(A)(M)に引き続いて今年度は(B)(C)を中心に調査を行った。

(A)や(M)については、昨年同様の良好な保存状況と複雑な覆土の埋積状況が確認され、大半が縄文時代後期中葉（甕淵式期）のものであることが明らかになった。また、「立石地床炉」や斜面の傾斜方向に沿う「出入り口構造」など住居としての構造も明瞭に確認することができた。

(B)や(C)については、竪穴住居跡5軒(CH)、土壇約100基(CP)などが今年度新たに確認された。竪穴住居跡は3軒が縄文時代中期のもので、縄文後期の竪穴間において確認された。土壇は縄文中期から後期のものなど様々であるが、段丘の縁辺部や配石のある平坦面周辺には、その配置に特徴が認められるものもあり、なかには覆土の埋積状況や配石、石組みを伴うことから墓塚の可能性が強いものも多く認められる。

遺物は昨年度分を含めて総計約18万点で、土器11万点、石器・礫7万点を数える。縄文時代中期から後期のものが主体であるが、昨年同様の良好な保存状況が特徴で、遺構内出土の割合が高い。また、ベンガラ、白色粘土、砂、アスファルト塊などの自然遺物が遺構覆土や床面から出土する点も注目される。

	住居跡	土壇	焼土	柱穴状 ビット	炭化物 集 中	土器集中	フレイク 集 中	合 計
A 地 区		17	2		3	7		29
B・C地区	41	120	26	162		50	2	401
合 計	41	137	28	162	3	57	2	430





調査区遠景



AH-14



AH-6



AH-7



AH-17 床面土器



MP-5 床面土器



CH-44・45・46



AH-19 出土土器



CH-46 石組み炉

野田生 2 遺跡 (B-16-48)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡八雲町野田生355-12ほか

調査面積：2,186㎡

発掘期間：平成13年5月7日～8月10日

調査員：中田裕香、立田 理

調査の概要

遺跡は、八雲町市街地の南東約7.5km、標高32～37mの海岸段丘上に位置し、噴火湾に注ぐ無名の沢をはさんで東側は野田生4遺跡、西側は野田生1遺跡に隣接している。

平成12年度に25%調査を行い、その結果を踏まえて本調査の範囲が決定された。調査は今年度で終了である。

基本土層はⅠ層：耕作土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d層(Ko-d)、Ⅲa層：黒色土、Ⅲb層：黒褐色土、Ⅳa層：褐色土、Ⅳb層：漸移層、Ⅴ層：黄褐色ロームで、遺物包含層はⅢa層～Ⅳa層である。調査区の西側は耕作によって包含層が削平されており、880㎡について遺構確認調査を行った。遺構と遺物

遺構は、竪穴住居跡7軒、墓4基、土壇30基、柱穴状ピット24ヵ所、焼土13ヵ所、集石1ヵ所、フレイク集中1ヵ所が検出されており、調査区北西の沢に面した緩斜面に分布している。これらのうち、縄文時代の後北C1式期の焼土3ヵ所とフレイク集中以外は、縄文時代中期のサイベ沢式・見晴町式の時期に属するものが大半である。

竪穴住居跡は円形のものや楕円形のものがあり、3ヵ所にまとまりがみられる。H-6では床面から埋設土器や横倒しになった土器が出土した。掘上げ土上面や覆土から大量の遺物が出土した住居跡(H-1・5)や覆土中に焼土が検出されたもの(H-4)もあり、住居の廃絶後、大安在B式の時期の頃までくぼみを利用して廃棄などが行われていたと考えられる。

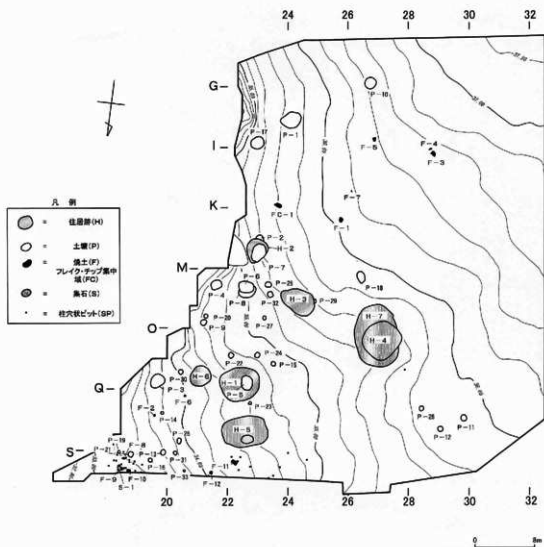
墓は円形のものや楕円形のものがあり、Mライン付近から検出された。墳口から半円状扁平打製石器(NP-25)や焼けた礫(NP-4)の検出されたものや、埋土から土器が横倒しの状態で出土したもの(NP-7)がある。

土壇は住居跡や墓の周囲に散在し、径は1m以下のものから2mほどのものまでである。墳底から土器が倒立した状態で検出されたもの(NP-15)や覆土から土器がまもって出土したもの(NP-3)などは墓の可能性も考えられる。覆土中から石器の出土した例にはNP-13とNP-30がある。前者は両面調整石器3点とフレイク90点が埋納されていた。後者には石皿や北海道式石冠が入れられていた。

柱穴状ピットは調査区の北側から検出され、集石の周囲に多く分布していた。集石は径80cmほどの範囲から砂利が検出されたもので、砂利の下位には焼土が認められた。

遺物は50,375点出土した。内訳は土器15,668点、石器等34,707点である。Lライン以北の出土点数が多く、遺構の分布する範囲にほぼ一致している。

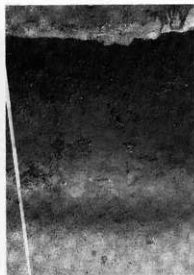
土器は縄文時代早期～後期の土器、縄文土器が出土しているが、縄文中期前葉～中葉の土器が主体を占める。調査区の北西部では早期の条痕文平底土器、南東部では縄文時代の後北C1式も出土している。石器はスクレイパーやすり石が多く、石鎌、たたき石、石皿がそれらについて出土している。



遺構位置図



調査終了状況(西から)



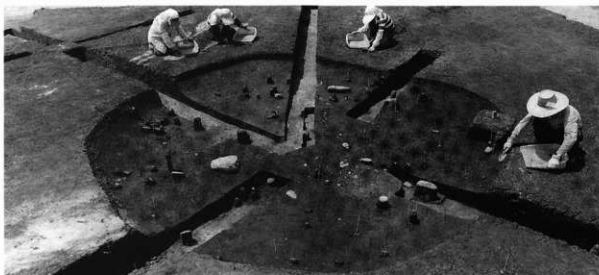
土層断面



H-1 (南から)



H-5 (西から)



H-4 (南から)



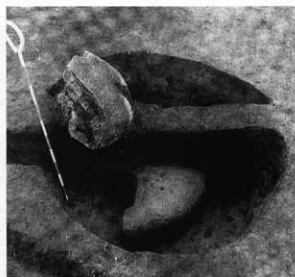
H-6 遺物出土状況 (南から)



H-15 遺物出土状況 (南から)



P-13 遺物出土状況 (北西から)



P-30 遺物出土状況 (北から)

野田生4遺跡 (B-16-50)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡八雲町野田生384他

調査面積：2,300㎡

整理期間：平成13年4月1日～平成14年3月31日

調査員：種市幸生、坂本尚史

遺跡の概要

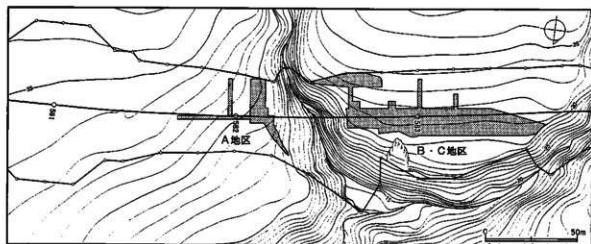
遺跡は、八雲市街の南東約7.5km、標高約25～33mの海岸段丘上に位置し、西側は無名の沢を挟んで野田生2遺跡に隣接している。発掘調査は平成12年度におこない、縄文時代中期～縄文時代晩期までの遺構、遺物を確認している。

遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑13基、焼土・炭化木片集中1ヵ所である。竪穴住居跡は長径8mを超える大型のもの（H-1）、卵形を呈するもの（H-2）があり、両者とも住居廃絶後の竪穴を利用して焼土、土坑などが形成されている。土坑は浅い竪穴状のもの（P-2、P-3）と長径2mほどの楕円で深さ1m前後のもの（P-4、P-6）があり、後者は遺物の出土状況から墓の可能性が考えられる。これらは出土遺物から縄文時代中期中葉に構築されたと考えられる。

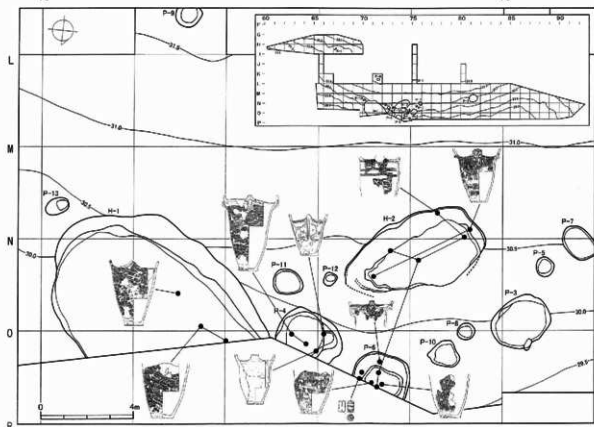
遺物は概数で、遺構から土器1,700点、石器400点、包含層から土器1,500点、土器180点が出土している。遺構出土の土器はサイベ沢Ⅷ式から見晴町式期が主で、大木8式の影響を受けたものもみられる。また、石器はスクレイパーが数量的に主体をなしている。包含層出土の土器は、殆どが遺構に並行する時期であるが、A地区からは縄文時代晩期中葉の土器がまとまって出土している。

整理の概要

整理作業は、遺物分類、土器・石器の接合作業、図化作業、台帳・出土遺物データの整理、現場撮影写真の整理、室内写真撮影、採取土壌のフローテーション作業、分析試料の抽出、報告書作成作業をおこなっている。出土遺物のデータ管理は全てパソコンを用い、出土状況、接合状況の把握などが迅速におこなえるようにした。接合作業は土器を中心に作業を進め、遺構間の接合状況も確認されている。分析は樹種同定、炭化種子分析、放射性炭素年代測定、黒曜石産地分析に関して依頼し、結果は報告書に掲載する予定である。



調査範囲と周辺の地形



遺構出土の主な復元土器



復元土器

おとしべ
落部1遺跡 (B-16-77)

事業名：北海道縦貫自動車道路（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡八雲町入沢374ほか

調査面積：5,471㎡

発掘期間：平成13年5月7日～10月31日

調査員：遠藤香澄、藤原秀樹

遺跡の概要

遺跡は、落部川左岸段丘上の北東向き緩斜面に位置し、標高は23～39mである。つつじ祭りで有名な落部公園に隣接し、北から北東方向にかけて噴火湾を望むことができる。

検出された遺構は住居跡2軒、土塋7基、Tピット7基、集石4ヵ所、焼土14ヵ所、炭化物集中1ヵ所である。遺構の多くは遺物を伴わず時期不明のものが多い。

この内、H-1は長軸が3m以下の楕円形で掘り込みも不明瞭な小形の住居跡であったが、覆土中からサイベ沢Ⅱ式に相当する土器が4個体折り重なるように出土した。P-1は竈口部に台石が検出された埋め戻しの土塋で、土塋墓の可能性が高い。Tピットは全てが溝状で、長軸方向が傾斜に平行するものが多く、列をなしているものもあった。集石のうちS-1・2は小形の円礫がまとまったものである。全点数の内、10g以下のものが50%以上を占め、中には焼成を受けているものもあった。

遺物は土器・石器などをあわせて約10,000点が出土した。土器は中期前半の円筒土器上層式が多く、中期後半の椀林式が続き、他に後期の天祐寺式（余市式）、晩期の大洞A式、それに続縄文時代の後北C₂土器がごく少数出土した。石器は石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、半円状扁平打製石器、北海道式石冠、砥石、台石・石皿などが出土した。剥片石器ではフレイクが少なく、定形的石器の比率が高いことが特徴である。礫石器は30ラインより西の斜面下方部分にまとまる傾向がある。

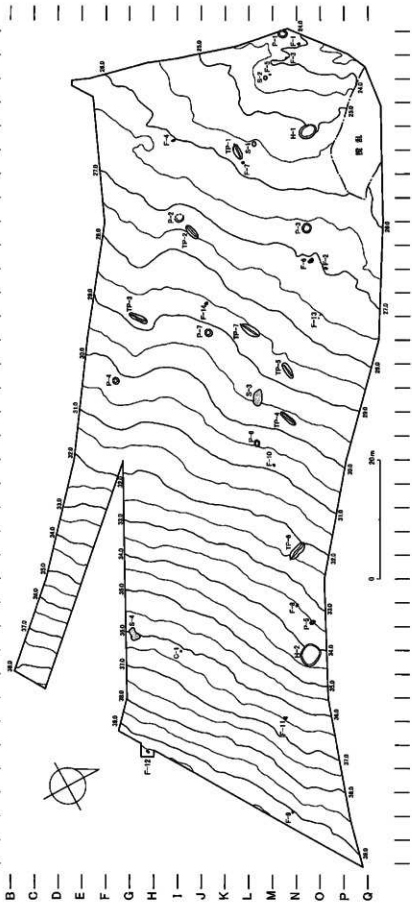


H-1 覆土土器出土状況（北東から）



T-P-7 完掘（北西から）

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43



测井位置图

栄浜1遺跡 (B-16-33)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：北海道山越郡八雲町栄浜200

調査面積：21,700㎡

発掘期間：平成13年5月7日～10月26日

調査員：熊谷仁志、谷島由貴、中山昭大、影浦覚、袖岡淳子、大森司統

遺跡の概要

遺跡は、八雲町の最南部の栄浜地区に位置し、市街地から南東に約18km離れている。南東側は茂無部川を挟み森町と接している。遺跡は海岸段丘面の標高22～50mに立地し、南東側は河岸段丘崖となっている。遺跡範囲は100,000㎡程に広がると思われ、道南でも大規模な遺跡の一つに挙げられる。

発掘調査は昭和56・57年度4,800㎡、昭和60・61年度1,680㎡、平成5年度271㎡、平成8年度1,245㎡が八雲町教育委員会によって行われ多大な成果を挙げている。これらの調査結果から遺跡の東端に位置する標高22～36mの河岸段丘部分では縄文時代前期～中期の大規模集落が形成されていたことが判明している。また、北海道縦貫自動車道に伴う調査は、平成12年度に604㎡を行った。

平成13年度は、海岸線に平行して標高は40～51mの北西から南東に長さ約620m、平均幅約40m、面積21,700㎡に及ぶ調査範囲の調査を行った。

全体の地形は大きく2つ、30ライン付近を境にして、南東側の茂無部川に面した河岸段丘面と北西側の海岸段丘に続く緩斜面に区分される。北西側緩斜面は60ライン付近が高く北西側は緩やかに低くなり北西端で標高約36m、途中2筋の大きな沢と幾つかの沢状の微地形がみられる。

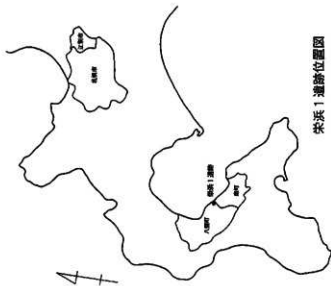
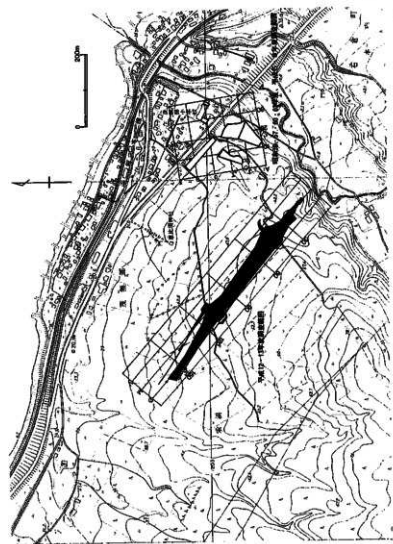
土層は大半が心土耕作で攪乱を受けているが、沢跡など地形の窪んでいる部分や元国有地であったところなどは耕作による攪乱を免れている。基本層序はⅠ層：表土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d層、Ⅲ層：腐植土、Ⅳ層：漸移層、Ⅴ層：ローム質土である。

遺構と遺物

河岸段丘面はやや平坦になり遺構が密集している。平成12年度は縄文時代後期前葉のフラスコ状ピット14基や小ピット等が検出されている。今年度は、縄文時代中期中葉の竪穴住居跡1軒、後期前葉の竪穴住居跡5軒、後期前葉の土坑8基、焼土、小ピット、集石等を検出した。緩斜面では、縄文時代早期の焼土3ヵ所、中期前葉の竪穴住居跡1軒、土坑8基、続縄文時代後北式期の土壇墓1基（P-20）、擦文時代の土坑1基、集石1ヵ所等が検出した。

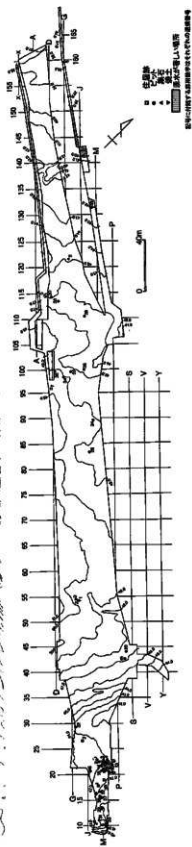
遺物は約33,000点出土し、縄文時代後期前葉を主体としている。とくに、河岸段丘面では遺構とともに遺物も多く出土し、緩斜面では量が少ない。それ以外の時期の遺物は早期前半のものが30ラインの沢とF-116区付近、中期中葉の遺物は河岸段丘の崖よりとB・D-98～120付近から、30ラインの沢から晩期の遺物が出土している。続縄文時代のものはE-42、I-100付近から、擦文時代の遺物は115ラインから北西側に出土している。

後期前葉の竪穴住居跡5軒と昨年度検出されたフラスコ状ピットは同一時期の遺構で集落内の配列を窺わせるものである。また、H-3からは三角柱状石製品が出土している。P-20は続縄文時代後北式期の土壇墓で3個体の土器と23点の石鏃等が墳底から検出されている。

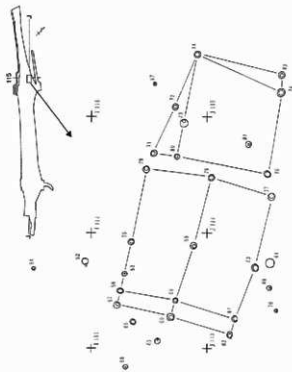


栄浜1 浄水場位置図

栄浜1 浄水場敷地の設定および位置図



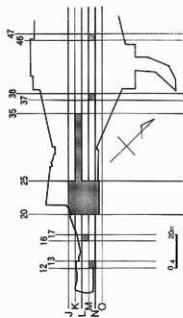
平成12・13年度給出浄水場位置図



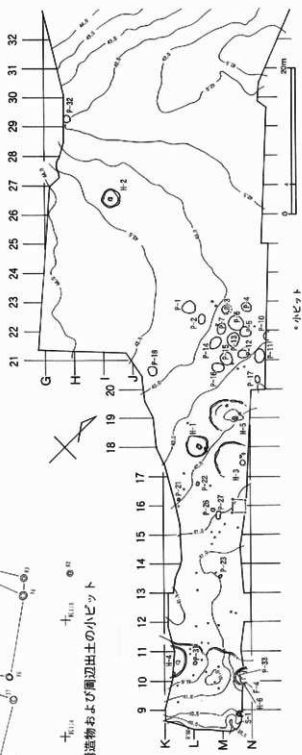
1層	黒土層上 黒土・赤土 の層 瓦片
2層	黒土層 黒土層上 の層 瓦片
3層	黒土層 黒土層上 の層 瓦片
4層	黒土層 黒土層上 の層 瓦片
V層	黒土層上 の層 瓦片

土層状況模式図

平成12年度調査位置図



柱立ちの構造物および周辺出土の小ピット



G～N-8～32区検出遺構位置図



H-1 完掘



H-2 遺物出土状況



住居跡群 完掘



P-20 遺物出土状況



S-1 遺物出土状況

山崎5遺跡 (B-16-62)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委託者：日本道路公団北海道支社
所在地：山越郡八雲町山崎195-1 ほか
調査面積：6,265㎡（平成11年度855㎡、平成12年度5,410㎡）
整理期間：平成13年4月1日～平成14年3月31日
調査員：遠藤香澄、皆川洋一、藤原秀樹、立田 理

整理の概要

発掘調査は平成12年度に終了している。前期後半の円筒下層c式期を主体とする住居跡、土壇、土墳墓、フラスコ状ピット、焼土跡、多量のフレイク・チップを含む遺物集中域など多数の遺構と21万点を超える遺物に加え人為的な削平区域とその作業に伴う再堆積層が検出されている。報告書刊行は平成13年度とし、12年度冬期には写真台帳の整理、素図の作成、土器の接合・復元、遺物の実測、拓本作成、集計作業、炭化種子の二次選別までの作業を行い、一部遺構・遺物の仮図版の作成まで終了した。

平成13年度の整理作業は山越3遺跡、山越4遺跡と並行して行っている。年度当初は土器の仮図版の作成、一覧表作成および遺構・包含層の遺物写真撮影を行い、写真図版を完成させた。また、遺構・遺物実測図のトレースが仕上がったものから順に挿図の作成を進め、最終的な割り付け、編集作業は10月に終了した。

山越3遺跡 (B-16-45)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査
委託者：日本道路公団北海道支社
所在地：山越郡八雲町山越402-1 ほか
調査面積：1,632㎡（平成12年度）
整理期間：平成13年4月1日～平成14年3月31日
調査員：立田 理

整理の概要

発掘調査は平成12年度に終了している。早期～後期の遺物が出土しているが、主体は中期前半のサイベ沢Ⅶ式期で、同時期の住居跡、土壇、焼土跡、遺物集中域が検出されている。報告書の刊行は平成13年度、山越4遺跡との合冊として刊行することとし、12年度冬期は一部残っていた一次整理作業（遺物水洗、注記、分類）から始めた。その後、原図の見直し、素図の作成、石器の細分類、遺物台帳の修正、炭化種子の二次選別等の作業を行った。

平成13年度4～10月は土器の接合、石器の実測・トレース、遺構図のトレース、拓本、集計作業を中心に、実測図のできたものから仮図版の作成も行っている。9月に入ってから復元作業にあたっては接合台帳を作成するなど、住居跡の各層位間や包含層間の接合関係、同一個体の把握等に努めた。サイベ沢Ⅶ式土器を中心に18個体が復元できた。土器の写真は従来の撮影に加え、残存状態が良好で文様の割付の明瞭な4個体（うち1個は山越4遺跡）について展開写真の撮影を依頼した。このほかの遺物は12月には山越4遺跡のものを含め写真撮影を終了、順次写真図版、挿図の作成を行った。

山越4遺跡 (B-16-46)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：山越郡八雲町山越336-1ほか

調査面積：2,516㎡（平成12年度）

整理期間：平成13年4月1日～平成14年3月31日

調査員：藤原秀樹

整理の概要

発掘調査は平成12年度に終了している。縄文時代前期から統縄文時代までの遺物が出土しているが、主体は中期前半のサイベ沢Ⅷ式期で、同時期の住居跡、土壌、焼土跡が検出されている。12年度の冬期は遺構図等の原因の見直し、素図の作成、石器の細分類、遺物台帳の修正、炭化種子の二次選別等の作業を中心に行った。

平成13年度4～10月は山越3遺跡同様に土器の接合、石器の実測・トレース、遺構図のトレース、拓本・断面実測、集計作業を中心に行った。土器の観察や接合作業では、やや離れてある2つの地区から出土する土器の時期に若干の相違があることから、とくに包含層間の接合関係や出土状況に留意した。一部遺物分布図・集計表、一覧表の作成、仮図版作成も行っている。また、石器の写真撮影は山越3遺跡のものと共にこの時期行った。10月からの復元作業では今年度から石膏に替え石油系化学樹脂を使用している。当初は作業に日数を要したが、慣れるに従い時間も短縮され、また、従来よりも軽く仕上がりが、最後の整形・着色等の作業が不要なことから予想以上の成果を上げている。最終的には29個体が復元できた。11月からは順次写真図版と挿図の作成を進め、12月からは山越3遺跡の資料とあわせ、最終的な編集作業を行った。



復元作業



土器接合作業



図版作成作業

本内川右岸遺跡 (B-15-7)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：茅部郡森町字石倉町610-7ほか

調査面積：2,746㎡

発掘期間：平成13年9月3日～10月26日

調査員：中田裕香、立田 理

調査の概要

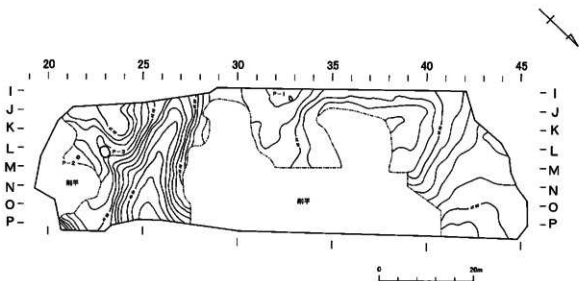
遺跡は、森町市街地から北西に約12km、北西を本内川、南東を三次郎川の支流の沢によって開析された段丘上に立地している。標高は44～48m、海岸線からの距離は約300mである。

基本土層は、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d層 (K o - d)、Ⅱ'層：灰黄褐色土、Ⅲ層：黒色土、Ⅳa層：暗褐色土～明褐色土、Ⅳb層：漸移層、Ⅴ層：黄褐色ロームで、包含層はⅢ層～Ⅳa層である。調査区は本来、ゆるやかな起伏をなしていたと考えられるが、中央部や南側の尾根状の部分は農地造成や土取りによってⅤ層やその下位の濁川テフラまで削平されていた。調査区の西側と南側には沢跡があるが、南側の沢は耕作時に埋められていた。

遺構と遺物

遺構は、土壌3基が調査区の南西部から検出された。これらの中には石皿・台石の入られたもの (P-2) や円筒土器上層b式が横倒しの状態で出土したもの (P-3) がある。

遺物は891点出土した。土器は縄文時代中期から後期前葉のものが主である。石器は石鏃、スクレイパー、石斧、すり石、たたき石、石皿・台石などが出土している。



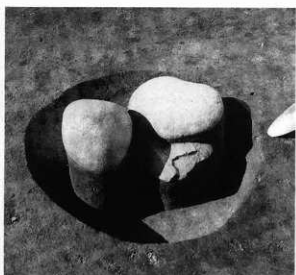
遺構位置図



遺跡東部 調査終了状況（西から）



調査状況（南東から）



P-2（東から）



P-3（西から）



P-3 遺物出土状況（南西から）

濁川左岸遺跡 (B-15-22)

事業名：北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：北海道茅部郡森町字石倉町401ほか

調査面積：1,300㎡

発掘期間：平成13年7月24日～10月26日

調査員：影浦寛、袖岡淳子

遺跡の概要

遺跡は、海岸から約700m内陸の標高37～45mの河岸段丘上に立地する。遺跡の南東を流れる濁川を4kmほど溯ると、温泉や地熱発電所で知られる濁川カルデラに至る。遺跡は濁川によって形成された森町側の高い段丘と、無名沢によって開析された八雲町側の一段低い段丘からなる。两段丘の間には古い沢跡が確認され、これを境に高位の段丘をA地区、低位の段丘をB地区と呼称した。今年度は調査対象範囲4,500㎡のうちA地区の濁川段丘縁850㎡と、B地区の無名沢の段丘縁450㎡につき調査を行った。森町側と八雲町側、調査範囲の南北両端を発掘したことになる。

基本土層はⅠ層：表土層、Ⅱ層：駒ヶ岳火山灰d（K o - d）層、Ⅲ層：黒褐色土層、Ⅳ層：黒色腐植土層、Ⅴ層：黄褐色ローム質土層、Ⅵ層：黄褐色砂利層からなる。K o - d火山灰層は調査範囲全体において層厚約80cmと厚く堆積していた。Ⅲ～Ⅴ層が遺物包含層であるが、縄文時代早期から統縄文時代にかけて時期の異なる土器が同地点、同水準において重なり合って出土した。このため、出土位置の上下関係から遺物の新旧を明らかにすることはできなかった。山地形で漸移層が未発達のため、包含層の流れ込みなど自然作用の擾乱が絶えず繰り返されていたのではないかと推測している。また、Ⅳ～Ⅴ層中には人頭大以上の礫が非常に多く検出された。

遺構と遺物

検出した遺構は住居跡15軒、ピット59基、焼土27ヵ所、小ピット176ヵ所である。住居跡は卵型のものいくつか見られたが、重複で形状が定かでないものもある。床面に石組みの炉を伴うものが8軒において確認された。H-15の床面からは縄文時代中期のサイベ沢Ⅵ式から見晴Ⅶ式相当の土器複数個体が出土した。ピットの中には土壌墓の可能性のあるもの6基（P-1・2・10・11・12・14）と、フラスコ状ピット1基（P-56）がある。また、176ヵ所が検出された小ピットの中には土器が倒立して1個体埋納されていたものや、底から石斧が出土したものもある。

現在一次整理継続中であるが、遺物総数は10万点を超えることが予想されている。土器の主体は縄文時代中期のサイベ沢Ⅵ式から後期のウサクマイC式にかけてのものである。他に縄文時代早期の東釧路式系の土器、前期の円筒土器下層式、統縄文時代の後北式などが出土している。石器はたたき石、扁平打製石器、北海道式石冠、台石・石皿類など礫石器が多く見られる。



H-10・15 遺物出土状況



P-18 (手前)・19 遺物出土状況



P-11 遺物出土状況



F-10 確認



H-1 遺物出土状況



H-1 HF-1 HP-1土層断面



B地区 住居跡群完掘



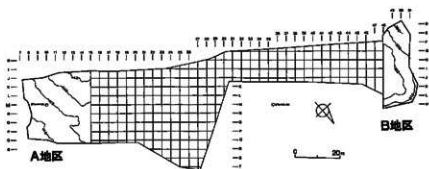
P-2 確認



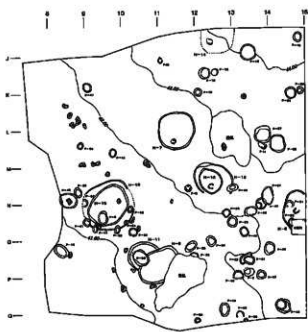
P-10 土層断面



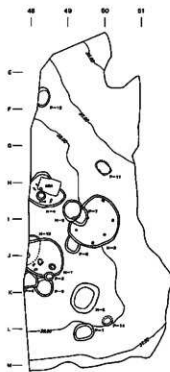
遺跡位置図



グリッド設定図・今年度調査範囲



A地区遺構位置図



B地区遺構位置図

キウス4遺跡 (A-03-92)

事業名：北海道横断自動車道(千歳～夕張)埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：千歳市中央208-12ほか

調査面積：4,240㎡(R地区)

整理期間：平成13年4月1日～平成14年3月31日(継続)

調査員：佐川俊一、阿部明義、富永勝也、山中文雄

整理の概要

キウス4遺跡では平成5・7～10年度に発掘調査を行い、北埋調報119集『キウス4遺跡』を初めて平成12年度までに8冊の報告書を刊行した。

今年度は昨年度に引き続き、約430万点の遺物が出土したR地区の整理作業を行った。土器は約650個体を復元した。すべて縄文時代後期後半である。また長期の接合作業により、数多くの接合データを得た。石器は各器種約600点、図版26ページを報告予定である。木製品は保存処理を進行中で、脚付容器など希少なものの一部を元興寺文化財研究所に委託している(平成14年度終了予定)。骨片や炭化種子などの微細遺物については、フローテーション資料の選別・同定作業により膨大な資料を得、当時の動物相・植物相やその利用などが明らかになってきている。以上の整理作業は、保存処理を除き今年度に終了する予定である。

また今までに刊行された報告書などから、キウス4遺跡全体のまとめを若干行予定である(表1・2例)。報告書の刊行は、平成14年度を予定している(『キウス4遺跡(9)』)。

表1 キウス4遺跡 全地区遺構・遺物集計

報告書	地区	調査面積 (㎡)	調査年 (期)	遺 構						遺 物				
				居住跡	埋穴住居	遺物貯	土器・柱穴等	焼土	その他	土器等	石器等	木製品等	その他	
【1】	(金城)	(3,380)	H5	7			多数				19,108	881		自然遺物
【2】	L	3,930	H8		1		3	715	北側盛土	346,733	58,317	37		未定り号他
	A	4,750			17		258	61	水堀・盛土	152,196	34,573	2		自然遺物他
【3】	H	640	H9			5	878	23	盛土	33,708	8,081	1		自然遺物
	K	200				2	236	3		10,956	895			
	I	5,400					29	1,535		南側盛土	39,275	25,447		
【4】	A2	2,230	H10		5		139	65		13,563	7,843	690		自然遺物他
【6】	A・B・C・ D・E・E1・ E2・J1-6	13,285	H7・9・ 10	13	1	1	54	471	直線状盛土・ 竪溝・7ゼツ ト・灰窯	18,036	7,979			鉄製品・ 古銭 他
【8】	R	4,240	H10		2	127	1,488	248		4,948	1,118	1		自然遺物
【7】	Q	3,920	H10		3	110	3,897	52	溝・盛土	105,921	28,130			自然遺物
【8】	F・G	7,274	H10			21	1,147	227	北側盛土	987,450	164,148			自然遺物他
【9】	R	(4,240)	H10 (-11)					323	南側盛土	約3,300,000	約1,000,000	約150		自然遺物手置
合計		46,269+〇		20	29	286	8,129+〇	5,723+〇		約5,030,000	約1,340,000	約880		

・報告書—【2】・【3】……は『キウス4遺跡(2)』・『キウス4遺跡(3)』……をさす。

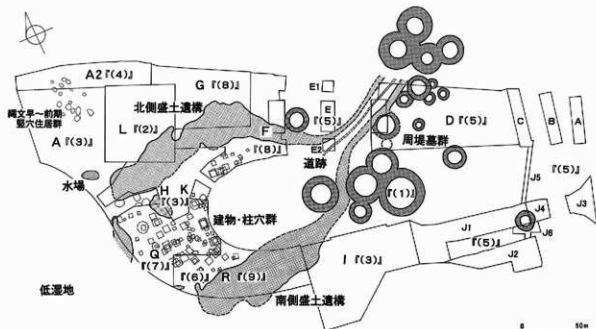
なお【1】とは、北埋調報119集『キウス4遺跡』をさす。

・調査面積—【1】は金城のトレンチ調査のため重複する部分がある。【6】【9】は同地区。

・調査年度—【9】のH11は遺物・土壌水洗。

・遺物—【9】の集計は完了しておらず、最終的には表記以上になる。

・千歳市教育委員会による調査分はこの表には含んでいない。



キウス4遺跡 主な遺構群と掲載報告書

・「(2)」・「(3)」…は「キウス4遺跡(2)」・「キウス4遺跡(3)」…をさす。
 なお「(1)」とは、北埋測図119集「キウス4遺跡」をさす。

表2 キウス4遺跡報告書 簡易索引

主なテーマ	主な報告書掲載ページ	内容
周堤墓	記載 「(1)」p.25～47 「(5)」p.37～111	X-1～7(・8・9)のトレンチによる確認調査 X-10～17・α、周堤墓内の墓礎31基(4体合葬墓など)
	考察 「(5)」p.228～266	研究史、周堤墓の分布、周堤墓の分類、キウス4遺跡の周堤墓の構築過程など
建物・柱穴群 (縄文後期)	記載 「(6)」p.23～249 「(7)」第1p.28～178・194～203 第2p.7～236	建物跡127件、土庫10基、フラスコ状ピット2基など 建物跡110件、土庫8基、フラスコ状ピット3基、土坑26基など (遺体の痕跡がある土庫基、炭化ドングリ入り柱穴あり)
	「(8)」第1p.238～314 「(6)」p.359～369	建物跡21件、土庫基14基、フラスコ状ピット3基、ロームピットなど 建物跡および柱穴ピットの分類・新旧関係「道跡」など
	考察 「(7)」第2p.359～373	規模による建物跡の分類、重複関係、配置、集落構成など
	「(8)」第1p.371～384 「(2)」p.50～183 「(3)」第1p.312～342ほか 「(8)」第1p.25～71 「(9)」(未刊)	建物の方位・配列、出入口付き住居検出遺跡一覽など 北側盛土の掘削部の一部を3ブロック分け 北側盛土の一部と南側盛土の一部 北側盛土2層分層、層別地相関係など 南側盛土上下2層14ブロック分け、層厚関係など
水場・河川利用 (縄文後期)	記載 「(3)」第1p.81～103 「(9)」(未刊)	湧水を利用したと考えられる水場遺構 岸の削・容器など多様な木製品、旧河道跡の枕列など
	考察 「(9)」(未刊)	(未定)
土器編年等 (縄文後期)	「(2)」p.379～389 「(8)」第1p.385～412 「(9)」(未刊)	堂林式研究史、文様の分類、各種編年分析、個體編年の土器 搬入土器、接合関係、縄文後期後半～晩期の編年 搬入土器、接合関係、縄文後期後半の編年(予定)
	記載 「(3)」第1p.44～80 「(4)」p.67～104	早期後半の6軒、前期前半の大型住居跡2軒など 早期後半～前期前半の住居跡5軒、土庫、焼土など
	考察 「(4)」p.219～231	早期～前期の集落構成、土器編年、木製品についてなど
キウス4遺跡のまとめ	「(9)」(未刊)	遺跡の変遷、遺構・遺物のまとめ、索引など(予定)

ユカンボシC15遺跡（A-03-263）

事業名：北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査

委託者：日本道路公団北海道支社

所在地：千歳市長都1190-11ほか

調査面積：14,880㎡（平成8年度：3,025㎡・平成9年度：8,855㎡・平成10年度：3,000㎡）

整理期間：平成13年4月1日～平成14年3月31日（継続）

調査員：三浦正人、鈴木信、吉田裕史洋

遺跡の概要

J R千歳駅の北方約6kmに位置する。往時、千歳川・長都川・ユカンボシ川等の水を集めた長都沼が広がる停滞水域・低湿地の西端部で、ユカンボシ川に対応する標高5～9mの地帯に営まれた、旧石器～近世アイヌ文化期の複合遺跡である。主体となる縄文～アイヌ文化期では、I B 4～I B 1・0 B層から、1万点以上もの木製品が出土している。I B 3層中には10世紀前葉の降下である白頭山-苫小牧火山灰（B-Tm）が断続的に分布する。木製品には、舟とその関係品・生活用品・狩猟具・祭祀具・建築材のほか、漆碗・曲物・竹製品などの本州産品も含まれている。

整理概要

調査は平成8・9・10年度に行われ、順次整理作業が継続されて、昨年度まで4冊の報告書を刊行している。通算5冊目となる今年度の報告は、西側低湿地部のI B 2・I B 1・0 B層の木製品約4,600点と未報告の分析・鑑定の結果の一部を掲載する。

木製品は、分類補正・台帳訂正・実測図作成・樹種同定・保存処理・接合復元・写真撮影を進めている。分類補正や台帳訂正は、木製品台帳をパソコンに入力して整理し、カード書き替えや写真整理等と連動を図る作業として継続している。実測図と写真は、小型品を机台上で大型品を床面でと、大きき長さにより対応した方法で実施している。樹種同定は、独立行政法人森林総合研究所 平川泰彦氏の指導のもとに、生物顕微鏡・走査型電子顕微鏡を使用して作業している。保存処理は、マンニトール十PEG含浸による真空凍結乾燥法とPEG含浸法で対処している。立体的・脆弱なものについては実測図作成や写真撮影に供する復元接合のため、報告が終了したものを強化・收藏のため計画的に進めている。また比較的短期間で処理が進む小型品を主体にして、釜石文化財保存処理センターにも依頼している。今年度で木製品の保存処理全体の約半数が終了する予定である。

前年度までの報告書の主な内容

[平成9年度 千歳市ユカンボシC15遺跡（1）北埋調報128集]

東側①③区の台地・低湿地の遺構と遺物

縄文文化期の周溝のある墓や土坑墓・縄文～アイヌ文化期の木製品など

[平成10年度 千歳市ユカンボシC15遺跡（2）北埋調報133集]

西側②④区の縄文時代の遺構と遺物・旧石器時代の石器と木本遺存体

[平成11年度 千歳市ユカンボシC15遺跡（3）北埋調報146集]

西側②④区の台地の縄文～アイヌ文化期の遺構と遺物

同低湿地部の縄文文化期前期以前の遺構遺物（木製品など）

住居跡・建物跡・土坑墓・焼土等・縄文土器・石器・金属製品・縄文文化期前期の木製品

[平成12年度 千歳市ユカンボシC15遺跡（4）北埋調報159集]

西側②④区の低湿地I B 3層より上位の遺構と木製品以外の遺物全て

同低湿地部の縄文文化期中後期（I B 3層）の木製品



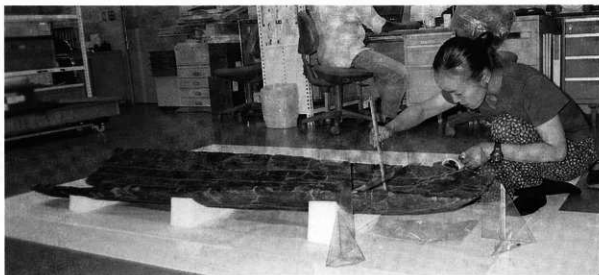
舟敷 出土状況（北西から）



舟敷 接合風景



舟敷 撮影風景



舟敷 実測風景

ケネフチ9遺跡 (A-03-276)

事業名：舞鶴追分線特改一種工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道札幌土木現業所

所在地：千歳市協和443番2号

調査面積：320㎡

発掘期間：平成13年6月11日～8月31日

調査員：富永 勝也、佐川 俊一

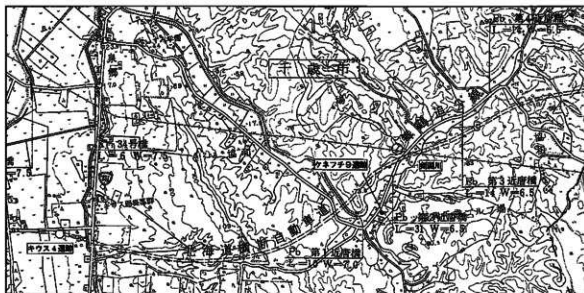
遺跡の概要

遺跡は、千歳市の東に隣接する追分町の市街地から西方に約4km、チブニー1遺跡から東方約4.5kmの位置にある。かつて松浦武四郎がこの地を通過したことが、安政4年の踏査記録『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌』の「夕張日誌」の記録にある。現在の剣淵川の語源、ケヌフチは千歳市史によるとkene (-us) -put「ハンノキ(群生する)川口」という意である。また永田方正『北海道蝦夷語地名解』には「Kene-use-pet ケ子ウシュベツ 赤楊川」と記載されている。遺跡が所在する協和は、昭和26年にそれまでのコムカラを改称した地名である。

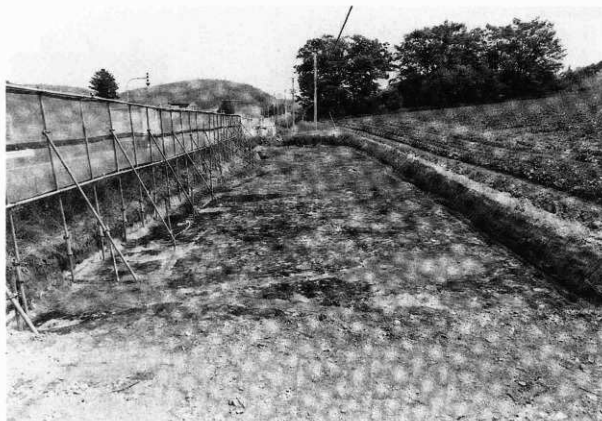
調査区の土層の状態は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：樽前a降下軽石堆積物、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：樽前c降下火砕堆積物、Ⅴ層：黒色土、Ⅵ層：漸移層、Ⅶ層：恵庭a火山灰風化層、Ⅷ層：同降下軽石層である。Ⅴ層中にはⅦ層の軽石が多く含まれており、黒色土が傾斜面に堆積していく過程で何度かの攪乱があることがうかがわれる。またⅤ層中には、南側の丘陵部からの地下水が流れ、調査区内に絶えず供給されている状況であった。

出土遺物

調査の結果確認された遺構は土壌10基(内2基がⅢ層下面)、Tピット4基、焼土2ヵ所である。遺物は主にⅤ層より出土した。縄文後期のウサクマイC式と前期の綱文式を主体とし、早期の東館路Ⅳ式をわずかに含む土器1,427点、フレイクチップを主とする石器7,850点、そのほかに近世の遺物等25点が出土し、総遺物点数は9,302点である。



遺跡の位置 (1 : 50,000)



調査区全景（南西から）



TP-1 発掘（北東から）

西島松5遺跡 (A-04-38)

事業名：柏木川河川改修工事に伴う発掘調査
 委託者：北海道札幌土木実業所
 所在地：恵庭市西島松543,544-1～3,546-1,2
 調査面積：3,123㎡
 発掘期間：平成13年5月7日～10月31日
 整理期間：平成13年4月1日～平成14年3月29日
 調査員：和泉田毅、新家水奈、佐藤剛、石井淳平

遺跡の概要

遺跡は、恵庭市の西側、JR恵み野駅から北西約800mのところに位置する。遺跡の東を柏木川、西を柏木川の支流であるキトウシュメンナイが流れ、遺跡は、この二つの小河川に挟まれた標高約25mの低い台地上に立地する。

今年度の調査では土器約52万点、石器約10万点、合計約62万点の遺物が出土した。遺構は竪穴住居跡9軒、土坑113基、Tピット2基、焼土98ヵ所、柱穴1,498基を検出した。昨年度の調査で検出した北大Ⅲ式期の土壇墓や、周溝のある墓は確認できなかった。さらに、柏木川の低位段丘面に続く段丘斜面の2ヵ所と台地上の1ヵ所で、多量の遺物を含む堆積層を確認した。人為的な堆積層の可能性が高いと判断し、盛土遺構と仮称した。



基本層序模式図



遺跡位置図

遺構と遺物

・盛土遺構（仮称）

段丘斜面2ヵ所、台地上1ヵ所で確認し、MA、MB、MCと呼称した。

MAは柏木川の低位段丘面へと続く段丘斜面に形成され、柏木川の蛇行によって形成された湾曲部分を埋めるように堆積する。集計が完了していないため不正確であるが、30～40万点の遺物が出土している。出土土器は御殿山式に属するものが多く、下層では堂林式、上層では大洞BC式並行のものが出土する。

MBはMAより20mほど上流に位置する。規模はMAより小さく、出土遺物も少ない。出土遺物は堂林式期から縄文時代中期のものが多く、

MCは台地のほぼ中央に広がる。調査区外にもさらに広がるものと推測され、一部は昨年度の調査区にも広がっていたようである。御殿山式から大洞BC式並行の遺物が出土している。

・竪穴住居跡

9軒検出した。時期のわかるものは縄文時代早期3軒、前期2軒である。このうち早期の1軒は長径が10mを超える大型のものである。

・土坑

131基検出した。多くは用途不明の掘り込みであるが、縄文時代後期後葉から晩期前葉にかけての土壌墓もいくつか含まれると考えている。

・Tピット

2基検出した。長径3m、下端の幅約10～20cmである。昨年度の調査でも同様の規模・形状をもつTピットを検出した。比較的近い時期に構築されたと考えが、時期は不明である。

・焼土

98ヵ所で検出した。Ⅱ層上面からⅢ層上面までの様々なレベルで検出されていることから、縄文時代早期から縄文時代までの幅広い時期のものが存在すると考える。

・小ピット

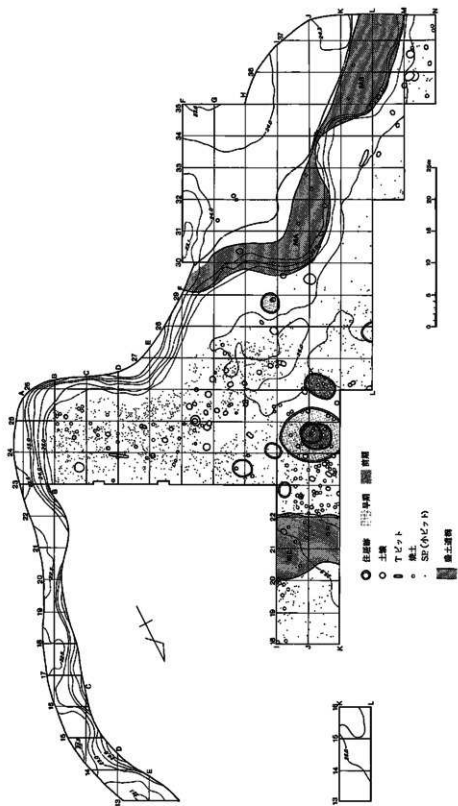
1,498基検出した。直径10～20cm、深さ10～50cm程度のものが多く、住居や建物を構成する柱穴であると考える。ほとんどの柱穴は堀方を有するが、まれに打ち込まれた枕状の柱穴も存在する。一部の例外を除き、住居や建物を構成する柱穴の組み合わせは確認できない。周辺の遺物出土状況から、小ピットの多くは縄文時代後期後葉から晩期前葉に属すると考える。

整理概要

平成12年度調査の報告書作成作業を行った。このうち、段丘斜面の出土遺物については、今年度調査で出土した遺物と同時に整理・報告することとし、整理作業の対象から外している。

整理作業は接合・復元、実測図・拓影図の作成、図版作成、フローテーション試料から抽出した炭屑の分類を行った。

さらに、昨年度に引き続き、北大Ⅲ式期の土壌墓から出土した金属製品の保存処理を行っている。今年度は観察カードの作成、X線写真撮影、クリーニング、実測図作成、脱塩、樹脂含浸を行った。これらの作業は平成14年度も引き続き行う予定である。また、残存状態の良い刀剣類20点は、財団法人興寺文化財研究所保存科学センターに保存処理を委託している。



図面付地質

にししまつ
西島松9遺跡 (A-04-02)

事業名：柏木川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

委託者：北海道札幌土木現業所

所在地：恵庭市西島松517

調査面積：1,800㎡

発掘期間：平成13年5月7日～7月31日

調査員：新家水奈、佐藤 剛

遺跡と調査の概要

遺跡は、柏木川の左岸、西島松5遺跡の南東側対岸に位置する。調査区のほとんどが水成堆積による地層であり、深いところでは2メートル近い河道跡が形を変えながらも旧柏木川に流れ込んでいたことを確認した。基本土層は西島松5遺跡と同じであるが、河道跡の調査は、遺物包含層に相当するⅡ層をさらに細分しておこなった。

遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、住居跡1軒、フレイク・チップ集中2ヵ所、柱穴・杭穴13ヵ所、焼土10ヵ所である。

住居跡は一部を河道跡によって壊されている。床面出土土器片から、縄文時代中期後半（北筒式）の時期に相当することがわかる。また、床面には炭化材や焼土が散乱していることから、焼け落ちたものと考えられる。

河道跡からは縄文時代早期末（東銅路Ⅳ式）～晩期初頭（大洞Ⅱ式相当）の遺物が出土した。河道跡よりも上の層からは7世紀頃（続縄文時代末あるいは擦文時代初頭、十勝茂寄式）の遺物と、同時期と考えられる骨片やフレイクを伴う焼土を検出した。

遺物は、遺構から土器計316点、石器1,879点、包含層から土器2,282点、石器1,207点が出土しており、遺構、包含層ともに骨片や炭化材等も検出した。



沢跡調査風景



H1 遺物出土状況



盛土遺構 (MA) 全景



盛土遺構 (MA) 断面



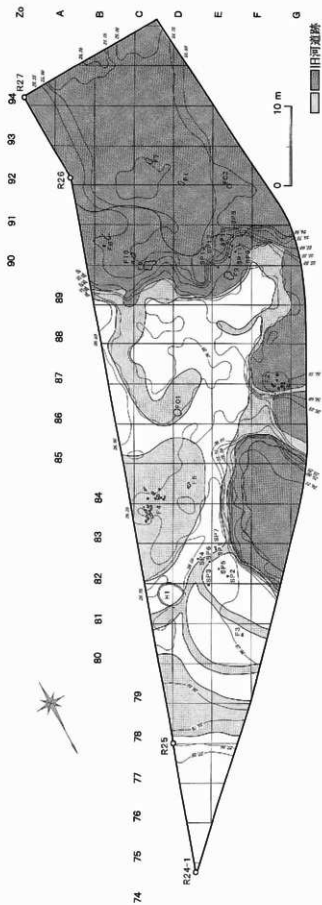
台地上完掘



盛土遺構 (MA) 遺物出土状況



早期・前期竪穴住居跡完掘



西島松9 灌漑遺構位置図

3 研修・研究会等

(1) 研修・研究会等

- * 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修（奈良市）
 - 「報告書作成課程」 村田 大 1月10～19日
 - 「遺跡写真課程」 大森司 統 1月25～31日
- * 奈良文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修（奈良市） 12月17～21日
 - 「遺跡地図情報課程」 袖岡 淳子
- * 衛生管理者免許試験受験準備講習会（札幌市） 5月23～25日
 - 芝田 直人
 - 山中 文雄
- * 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会（徳島市） 6月7・8日
 - 大澤 満
 - 吉田貴和子
 - 小笠原 学
- * 日本文化財科学会 田口 尚 6月22～25日
- * 平成13年度第1回全国埋蔵文化財法人連絡協議会
コンピュータ等研究委員会（名古屋市） 6月28・29日
 - 阪口 博治
 - 越田賢一郎
 - 倉橋 直孝
- * 第13回「埋蔵文化財写真技術研究会」（奈良市） 7月6・7日
 - 中山 昭大
 - 吉田裕史洋
- * 保存処理依頼先の施設および業務内容の視察 7月6日
 - 田口 尚
- * 平成13年度「地域視覚教材制作研修講座」（札幌市） 7月25～27日
 - 倉橋 直孝
- * 「算定基礎」事務説明会（札幌市） 7月11日
 - 小杉 充
- * 平成13年度 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（盛岡市） 10月4・5日
 - 村山 誠巳
 - 礪田 千秋
- * 平成13年度北海道教育関係公益法人研修会（札幌市） 10月19日
 - 吉田貴和子
 - 阪口 博治
 - 菅野 聡
- * 平成13年度埋蔵文化財法人連絡協議会北海道・東北地区会議（山形市） 10月24・25日
 - 立川トマス
 - 菅野 聡
 - 葛西 宏昭
- * 平成13年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会
北海道・東北地区コンピュータ等研究委員会（いわき市） 10月25・26日
 - 大沼 忠春
 - 倉橋 直孝

*平成13年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会 コンピュータ等研究委員会(札幌市)	10月25・26日
宮崎 勝 柳瀬 茂樹 阪口 博治 菅野 聡 大沼 忠春 越田賢一郎 倉橋 直孝	
*新任衛生管理者能力向上教育講習会(札幌市)	12月4・5日
佐川 俊一 遠藤 香澄	
*年末調整等説明会(江別市)	11月21日
小杉 充 今本 広信	
*公金運用セミナー(札幌市)	11月26日
菅野 聡 磯田 千秋	
*全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修(韓国)	11月5～10日
大森司 統	
*全国埋蔵文化財法人連絡協議会海外研修(中国)	11月29日～12月7日
藤原 秀樹 広田 良成	
*関西保存科学研究会・東北保存科学研究会交流会	11月30日～12月2日
田口 尚	
*南北海道考古学会情報交換会(長万部町)	12月1・2日
発表者 野田生2遺跡 立田 理 栄浜1遺跡 大森司 統 青苗砂丘遺跡 菅川 洋一 穂香壑穴群 村田 大	
*「発掘された日本列島2002」実行委員会(東京)	12月10日
越田 賢一郎 愛場 和人	

(2) 遺跡見学会等協力

*平成12年度遺跡発掘報告会(センター研修室)	4月21日
*虎杖浜2遺跡体験発掘(白老町立虎杖浜中学校6名)	5月17日
*虎杖浜2遺跡見学(白老町立白老小学校教諭理科サークル10名)	5月24日
*西島松5遺跡体験発掘(札幌市立曙小学校37名)	6月6日
*宮戸4遺跡見学(鶴川町立宮戸小学校16名)	6月7日
*西島松5遺跡体験発掘(札幌市立あやめの小学校修学旅行65名)	6月27日
*虎杖浜2遺跡見学(明治大学公開講座24名)	6月27日
*西島松5遺跡体験発掘(札幌市立開成小学校修学旅行91名)	7月4日
*宮戸4遺跡見学(二宮小学校15名)	7月13日

* 宮戸 4 遺跡見学 (田浦小学校20名)	7月19日
* 白滝遺跡群 (白滝3遺跡) 見学 (支湧別小学校16名)	7月23日
* 虎杖浜 2 遺跡体験発掘 (平成13年度白老屋根のない博物館PR体験ツアー-25名)	7月25日
* 平成13年度北海道考古学会遺跡見学会 (虎杖浜 2 遺跡)	7月28日
* 西島松 5 遺跡見学 (苫小牧市博物館友の会40名)	7月28日
* 虎杖浜 2 遺跡体験発掘 (白老町立虎杖小学校17名)	9月4日
* 野田生 1 遺跡見学 (八雲町商工会)	9月9日
* 虎杖浜 2 遺跡体験発掘 (白老町立白老小学校 3年 36名)	9月19日
* 虎杖浜 2 遺跡体験発掘 (白老町立緑ヶ岡小学校60名)	9月20日
* 濁川左岸遺跡体験発掘 (森町立濁川小学校 8名)	9月26日
* 虎杖浜 2 遺跡体験発掘 (白老町立白老小学校 5・6年 60名)	9月27日
* 穂香整穴群発掘見学会 (根室市民ほか45名)	9月29日
* 宮戸 4 遺跡見学 (鱈川町高齢者大学34名)	10月5日
(3) 部内研修・報告会	
* 平成13年度現地研修会 (八雲町) 講師 元 東海大学助教授 稲葉和也 八雲町郷土資料館 三浦孝一	9月7日
* 平成13年度現地調査報告会 (センター研修室)	11月29日
(4) 派遣・講演依頼	
講師	
* 平成12年度国立民族学博物館共同研究会 (大阪市) 《出席》 越田賢一郎	1月12~14日
* 平成13年度アイヌ工芸品展出展資料調査 (平取町) 《派遣》 田口 尚	1月23日
* 平成13年度アイヌ工芸品展出展資料調査 (江別市) 《派遣》 田口 尚	1月24日
* 平成13年度アイヌ工芸品展出展企画委員会 (札幌市) 《派遣》 田口 尚	1月25日
* 平成13年度アイヌ工芸品展出展企画委員会 (苫小牧市) 《派遣》 田口 尚	2月8日
* 環日本海交流史研究集会 (金沢市) 《派遣》 越田賢一郎	2月23日
* 考古学講座「考古学と民族(俗)学」(八戸市) 《講師》 越田賢一郎	3月15日
* 平成12年度遺跡発掘報告会 (余市町) 《派遣》 越田賢一郎 村田 大	3月18日
* 市民のための「わかりやすい縄文講演会」(伊達市) 《講師》 三浦 正人	3月26・27日
* 平成13年度アイヌ工芸品展函館会場 《派遣》 田口 尚	5月28日~6月2日
* アイヌ工芸品の出展資料引継業務 (市立函館博物館から苫小牧市博物館へ) 《派遣》 田口 尚	7月2~5日

- *平成13年度財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 7月15日
普及啓発講演会（苫小牧会場）
〈講師〉 越田賢一郎
- *科学研究費補助金研究会（サハリン） 7月23～27日
「サハリンから北東日本海城における古代・中世交流史の考古学的研究」
〈派遣〉 石井 淳平
- *平成13年度アイヌ工芸品展苫小牧会場における 7月10日
展示作業及び資料状態の検査協力について
〈派遣〉 田口 尚
- *文部省科学研究費古人骨と動物遺存体に関する総合研究 7月27・28日
シンポジウム北海道からの新視点
「もう一つの日本文化—縄文の人と文化を考える—」
〈派遣〉 大沼 忠春
- *味の素食文化センター研究助成に関する調査協力 8月1日～3月末日（予定）
「近世アイヌ漆器碗の使用と流通に関する文化財科学的研究」
〈派遣〉 三浦 正人
田口 尚
鈴木 信
- *科学研究費補助金研究会（札幌市） 8月9・10日
「サハリンから北東日本海城における古代・中世交流史の考古学的研究」
〈派遣〉 石井 淳平
- *アイヌ工芸品展の出展資料引継業務（釧路市立博物館） 8月27日～9月1日
〈派遣〉 田口 尚
- *科学研究費補助金による研究協力 8月24～27日
「日本列島南北端の住居形成過程に関する学際的研究」
（白老町、静内町、様似町、帯広市）
〈派遣〉 越田賢一郎
- *平成13年度社会科教育研修講座 9月18日
〈講師〉 越田賢一郎
- *仙台藩白老元陣屋資料館講座 10月11日
「虎杖浜2遺跡発掘調査報告会」
〈講師〉 佐藤 和雄
- *南茅部町垣ノ島B遺跡より発掘した、土坑墓（漆製品） 2月13～15日
運搬のための処理指導依頼について（南茅部町）
〈派遣〉 田口 尚
- *石狩市紅葉山49号遺跡で発見されたヒグマの足跡の保存処理（石狩市） 9月6日
〈派遣〉 田口 尚
- *「大笠谷3遺跡」出土物調査（木古内町） 10月2日
〈派遣〉 田口 尚
- *泊村郷株1遺跡発掘調査（泊村） 10月9日
〈派遣〉 越田賢一郎
- *石狩市紅葉山49号遺跡調査で発見された木製品の保存処理に関する指導助言（石狩市）
〈派遣〉 田口 尚 10月25日
- *「埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究」 11月1日・2日
〈派遣〉 長沼 孝
- *アイヌ工芸品展企画委員会（札幌市） 11月21日

- 《派遣》 田口 尚
- * 科学研究費補助金による研究 11月28・29日
「日本原始絵画の図像学的研究」
- 《派遣》 長沼 孝
- * 栗山町開拓記念館収蔵物の鑑定等（栗山町） 12月5日
- 《派遣》 越田賢一郎
- * 東北日本の旧石器文化を語る会 12月23・24日
- 《派遣》 長沼 孝
- * 科学研究費補助による研究（富山市） 12月27～29日
- 《派遣》 石井 淳平
- * 平成13年度国立民族学博物館共同研究会 12月13～16日
- 《出席》 越田賢一郎
- * 平成13年度北海道考古学会遺跡調査報告会 12月15日
- 発表者 皆川 洋一「青苗砂丘遺跡」
村田 大「穂香壱穴群」
- * 平成13年度国立民族学博物館共同研究員 4月1日～3月31日
- 《委嘱》 越田賢一郎

4 資料貸し出し等

提供先	目的	資料名・内容	期間
田中英司	学術刊行物『日本先史時代におけるデボの研究』に掲載	フィルム-東山5遺跡【石器出土写真（1点）】、嵐山2遺跡【石器出土写真（1点）】、国見2遺跡【石器出土写真（1点）】、西昭和2遺跡【石器出土写真（1点）】	
株式会社ワールド フォトプレス	「ナイフマガジン」2001年4月号に掲載	フィルム-二風谷遺跡【刀子・マキリ（1点）】、美々7遺跡【山刀（1点）】	
幌延町教育委員会	文化財保護専門委員会議で使用	ビデオ-函館空港遺跡群と縄文人の青函交流（1点）、縄文遺跡を探検しよう～函館空港遺跡群～（1点）	
株式会社ジャパン情報通 信センター	「文化財発掘出土情報」2001年5月号「各地の動向」に掲載	フィルム-野田生1遺跡【朱塗り注口土器（1点）】	
国立歴史民俗博物館	館蔵資料目録『落合計策縄文時代遺物コレクション』に掲載	フィルム-矢不米天調宮【延叙歴帳真図（1点）】	H13.4.20 ～6.30
有限会社新創社	東京書籍発行『ビジュアルワイド 図説日本史』の掲載絵図に使用	フィルム-白滝遺跡群【尖頭器（1点）】	～7.2
北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座 加藤博文	国際シンポジウムで発表のため	フィルム-白滝遺跡など（7枚）	
株式会社藤談社	「再現日本史」に掲載	フィルム-西島松5遺跡【墓（1点）】	

※平成13年12月末日までに受付けたものを掲載した。

5 平成13年度刊行予定報告書一覧

- 第165集 【八雲町 山崎 5 遺跡】
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第166集 【八雲町 山越 3 遺跡・山越 4 遺跡】
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第167集 【八雲町 野田生 2 遺跡】
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第168集 【鶴川町 宮戸 4 遺跡】
日高自動車道厚真門別道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第169集 【白滝村 白滝遺跡群（Ⅲ）】
一般国道450号白滝丸瀬布道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第170集 【根室市 穂香竪穴群（1）】
一般国道44号根室道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第171集 【八雲町 野田生 4 遺跡】
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第172集 【白老町 虎杖浜 2 遺跡（2）】
一般国道36号登別拉幅工事（虎杖浜工区）用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第173集 【千歳市 チブニー 1・チブニー 2 遺跡】
一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第174集 【千歳市 ケネフチ 9 遺跡】
舞鶴追分線特改一種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第175集 【八雲町 栄浜 1 遺跡】
北海道縦貫自動車道（七飯～長万部）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第176集 【千歳市 ユカンボシC15遺跡（5）】
北海道横断自動車道（千歳～夕張）埋蔵文化財発掘調査報告書
- 第177集 【江別市 対雁 2 遺跡（3）】
石狩川改修工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

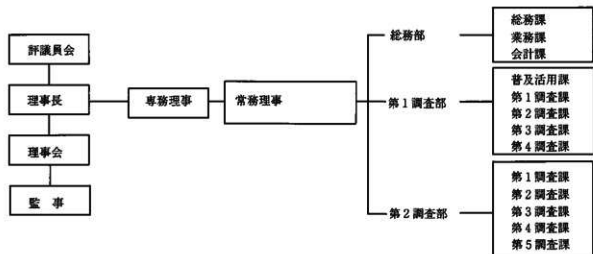
6 組織・機構

役員（平成13年12月31日現在）

理事長	大澤 満	
専務理事	宮崎 勝	
常務理事	（木村尚俊 7月17日死去）	
理事	朝野 隆	（北海道札幌東高等学校長）
理事	石林 清	（北海道教育文化協会理事長）
理事	岡田宏明	（北海道立北方民族博物館長）
理事	菊池俊彦	（北海道大学教授）
理事	北川芳男	（日本地質学会名誉会員）
理事	田端 宏	（道都大学教授）
理事	峰谷光雄	（由仁町教育委員会教育長）
監事	村山邦彦	（財団法人北海道生涯学習協会副会長）
監事	佐藤一夫	（苫小牧市勇武津資料館長）

評議員（平成13年12月31日現在）

評議員	加藤邦雄	（札幌市埋蔵文化財センター埋蔵文化財担当課長）
評議員	申田俊巳	（北海道教育庁企画総務部教育政策課長）
評議員	佐藤俊和	（北海道教育庁生涯学習部文化課長）
評議員	昌子守彦	（酪農学園大学教授）
評議員	高橋 侃	（江別市教育委員会教育長）
評議員	鶴丸俊明	（札幌学院大学助教授）
評議員	永井秀夫	（北海道大学名誉教授）
評議員	野村 崇	（財団法人北海道開拓の村学芸課長）
評議員	藤原道弘	（江別市立江別第一中学校長）
評議員	森重権一	（北海道教育庁生涯学習部次長）



7 職員（平成13年12月31日現在）

総務部

総務部長	○柳瀬 茂樹
総務課長	○阪口 博治
主任	菅野 聡
主事	小杉 充
主事	小笠原 学
主事	金谷 英男
主事	小笠原貞夫
会計課長	吉田貴和子
主任	礪田 千秋
主事	今本 宏信

業務課長	○山本 誠己
主任	葛西 宏昭
主事	中村 貴志
主事	市原 祺清

○村山 誠己
○葛西 宏昭
○中村 貴志
○市原 祺清

第1調査部

第1調査部長	(兼務) ○大沼 忠春
普及活用課長	○越田賢一郎
主任	藤本 昌子
主任	菅川 洋一
主任	倉橋 直孝
主任	愛場 和人

第1調査課長	立川トマス
主任	花岡 正光
主任	田口 尚

第2調査課長	西田 茂
主任	鎌田 望
主任	芝田 直人
文化財保護主事	柳瀬 由佳

第3調査課長	○長沼 孝
主任	越田 雅司
主任	村田 大
主任	鈴木 宏行
文化財保護主事	広田 良成
文化財保護主事	直江 康雄

第4調査課長	遠藤 香澄
主任	○中田 裕香
主任	○藤原 秀樹
文化財保護主事	立田 理

第2調査部

第2調査部長	○大沼 忠春
第1調査課長	○種市 幸生
主任	菊池 慈人
主任	藤井 浩
文化財保護主事	坂本 尚史
文化財保護主事	福井 淳一

第2調査課長	佐藤 和雄
主任	和泉田 毅
主任	土肥 研晶
主任	新家 水奈
主任	末光 正卓
文化財保護主事	佐藤 剛
文化財保護主事	石井 淳平

第3調査課長	佐川 俊一
主任	笠原 興
文化財保護主事	阿部 明義
文化財保護主事	富永 勝也
文化財保護主事	山中 文雄

第4調査課長	熊谷 仁志
主任	谷島 由貴
主任	中山 昭大
主任	影浦 覚
主任	袖岡 淳子
文化財保護主事	大森司 統

第5調査課長	三浦 正人
主任	鈴木 信
主任	○西脇対名夫
文化財保護主事	吉田裕史洋
文化財保護主事	酒井 秀治

○：北海道教育庁の派遣職員

8 訃報

平成13(2001)年7月17日、当センター常務理事(兼第1調査部長)の木村尚俊が、享年58歳で急逝いたしました。経歴と業績を紹介し、追悼の意を表したいと思います。

木村尚俊 略歴

昭和19(1944)年1月10日	台湾にて出生 その後熊本に移る
昭和37(1962)年3月	大分県日田高校卒業
昭和41(1966)年3月	早稲田大学教育学部卒業
昭和46(1971)年3月	北海道大学大学院文学研究科博士後期課程日本史学専攻退学
昭和46(1971)年4月	北海道大学文学部附属北方文化研究施設助手
昭和48(1973)年4月	北海道教育庁文化課勤務
昭和54(1979)年9月	(財)北海道埋蔵文化財センター派遣 苫小牧市フレベツ遺跡群の調査に従事
昭和55(1980)年	千歳市・苫小牧市美沢川流域の調査に従事
昭和56(1981)年	江別市吉井の沢1遺跡、上磯町戸切地陣屋跡の調査に従事
昭和57(1982)年	登別市千歳5遺跡、泊村堀株1、堀株2遺跡の調査に従事
昭和58(1983)年4月	北海道教育庁文化課勤務
平成11(1999)年8月	北海道教育庁文化課参事、(財)北海道埋蔵文化財センター常務理事(派遣)
平成13(2001)年7月17日	逝去

著作目録

(論文)	発行年月	論文名	掲載書・掲載誌	発行者
	昭和50(1975)年12月	『縄文文化早期』	『北海道史研究』第9号	北海道史研究会
	昭和55(1980)年5月	『川尻南チャシ・弁天1号チャシ・弁天2号チャシ』	『日本城郭大系 1』北海道・神興	新人物往来社
	昭和55(1980)年5月	『縄文文化早期』	『北海道考古学講座』	みやま書房
	昭和56(1981)年6月	『千歳美沢川遺跡群』	『北海道大百科事典・下』	北海道新聞社
	昭和57(1982)年4月	『北海道美沢川4遺跡』	『日本考古学年報 32 / 1979年度版』	日本考古学協会(共著)
	昭和59(1984)年2月	『周埴遺』	『北海道の研究 1』考古編1	清文堂
	昭和63(1988)年5月	『北海道』	『月刊考古学ジャーナル』№291 特集:1987年の考古学世界の動向	ニュー・サイエンス社
	平成8(1996)年3月	『北からの移住者』	『北海道の歴史 60話』	三省堂
	平成13(2001)年7月	『北国の発掘調査あれこれ』	『月刊考古学ジャーナル』№475	ニュー・サイエンス社

(報告書)

発行年月	報告書名	発行者
昭和50(1975)年6月	『遺失第2チャシ營遺跡調査報告書』	北海道教育委員会
昭和51(1976)年3月	『香深井遺跡・上巻』	東京大学出版会
昭和53(1978)年3月	『北海道縦貫自動車道(北広島～札幌南)埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-広島町大曲B・C遺跡-』	北海道教育委員会
昭和55(1980)年3月	『フレベツ遺跡群-新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書-』	(財)北海道埋蔵文化財センター
昭和56(1981)年3月	『美沢川流域の遺跡群IV-新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書-』	(財)北海道埋蔵文化財センター
昭和57(1982)年3月	『史跡松前藩戸切地陣屋跡-昭和56年度調査報告-』	上磯町教育委員会
昭和58(1983)年3月	『千歳5遺跡』	(財)北海道埋蔵文化財センター

調 査 年 報 14

平成13年度

平成14年3月8日発行

編集・発行 財団法人北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685-1
TEL 011-386-3231・FAX 011-386-3238
URL:<http://www.domaibun.or.jp>
E-mail:mail@domaibun.or.jp

印 刷 株式会社須田製版
〒063-8603
札幌市西区二十四軒2条6丁目1番8号
TEL011-621-0275(代)
